

論文

海外市場における日本産生糸の用途に関する

学説の整理と再検討

京都学園大学 経済学部

大野 彰

要 旨

日本産生糸は品質が低かったので一時期の欧米市場で経糸部門から締め出されたと説く通説は、概ねリチャードソンとブリースンが 1890 年代に展開した主張に依拠している。しかし、両者の主張を仔細に検討してみると、文言の中に相互に矛盾する箇所や誇張があることがわかる。しかも、共に日本産生糸の短所を一面的に強調する一方で、イタリア産生糸や上海産生糸の短所には口をつぐむなど、その主張は著しく偏っており公平性を欠いている。確かに 1890 年代に日本産生糸の品質が低下する場合があったが、それは生糸価格が上昇して売り手市場になる局面では、故意に品質の低い生糸を作った方が日本の製糸業者にとっては得られる利益が大きくなったからである。それだけに日本の製糸業者による粗製濫造の根は深かった。リチャードソンやブリースンには、利潤を極大化することのできる生糸品質が日本とアメリカで食い違っていることがわかっていた。彼らは、問題の根深さを知っていたからこそ、品質の劣る日本産生糸はアメリカでは経糸として使用されないという嘘をついてまで日本側の行動を変えさせようとしたのである。彼らの真意は日本の製糸業者による意図的な品質の切り下げをやめさせたいという点にあり、日本産生糸はアメリカでは経糸として使用されないという主張は単なる脅しでないし誇張に過ぎず、事実を歪曲している。時人が虚実を取り混ぜた主張を展開している以上、虚と実を見分けることは、後世の歴史家が果たすべき任務である。ところが、通説は、リチャードソンやブリースンの主張を真実と誤認した。実際には、信州上一番格生糸も含めて日本産生糸が欧米市場で経糸部門から締め出されたことなど初めからの一度もなく、日本産生糸は一貫して経糸としても使用されていたのである。

キーワード: 経糸、緯糸、純絹織物、絹綿交織物、ラウジネス

1. 問題の所在

学説史上、日本産生糸は外国市場で専ら緯糸として使用されていたという見解を最初に唱えたのは、安堵泰吉郎氏であろう。同氏は、その論文の本文で「元来外国需要が明治初年の日本糸に期待した所は其の精良ではなく只品位の整一荷口の大量であった」と述べた後に「荻原鎌太郎『社業談』八頁以下に当年は品位の精良よりも大量化標準化を必要としたことが述べられている」という脚注を添え、さらに先の本文を継いで「蓋し明治末迄は海外機業家は其織物生産に於て我生糸を緯糸として伊佛産の経糸に配するを常とし、前者は必ずしも後者の精良を必要としなかった」¹と記している。安堵泰吉郎氏は後に改姓して森泰吉郎と称するようになるが、改姓後に著した書においても、「明治31年[1898年]原善三郎『生糸貿易論』は品位の精良よりも品位の一定によつて緯糸市場を独占すべしと論じてゐる、(同上第8節生糸改良の方針を論ず)」²と記して、日本産生糸が海外で緯糸として用いられていたとの見解を繰り返している。なお、その後、森泰吉郎は、学界を去って実業界に転じたため、彼が残した数編の論文と一冊の著書(『蚕糸業資本主義史』)は、ほとんどの人には忘れ去られることになった。

石井寛治氏は、その著書の本文で「横浜生糸売込問屋の代表的存在であった原善三郎は、98年刊の『生糸貿易論』のなかで、「生糸改良の方針」として、(中略)緯糸中心でゆくべきだと論じているのであり、当時すでに器械製糸業の中心地であった長野県諏訪郡の製糸家や、座繰製糸業の中心地群馬県の製糸家をはじめとし、大多数の製糸家は、この緯糸中心方針を支持したのであった」と述べた後に「この点を明確に論じたものは見当たらないが、さしあたり確氷社社長荻原鎌太郎の『社業談』をあげておく」という脚注を添えている³。

このように日本産生糸が専ら緯糸として使用されていたという見解の裏側には、当然のことながら日本産生糸は経糸にはならなかったという理解が存在する。森氏は、「然るに、[明治]43年[に刊行された]、二宮峰男『生糸貿易と金融』を見ると経糸市場に日本糸が盛んに侵入しつつある事が分る。(同書19頁)そして日露戦後米国需要の半額を日本が供給するに至つた事から推して(中略)当時日本糸は経糸侵入の時代であつたと思ふ」⁴と記し、日本産生糸がアメリカで経糸として使用されるようになったのは、日露戦後になってからだという見解を唱えた。

石井氏は、「1906年には、横浜生糸合名会社社員佐藤永孝は、(中略)経糸部面での日本生糸の地位が増大しつつあることを報告している」⁵と述べ、日本産生糸が経糸として使用されるようになったのはやはり日露戦争(1904-1905年)の後だという理解を示した。但し、石井氏が1890年代初めまでは日本産生糸は経糸としても使用されていたと説くのに対して⁶、森氏は1890年代の状況には言及していない。おそらく森氏は、日露戦争までは一日本産生糸は貫して緯糸として使用されていたとの立場に

1 安堵泰吉郎「我国生糸業に於ける産業革命の発端」、『社会政策時報』第103号、1929年4月1日、61-62ページ。

2 森泰吉郎『蚕糸業資本主義史』、森山書店、1931年、81ページ。

3 石井寛治『日本蚕糸業史分析』、東京大学出版会、1972年、45ページ、55ページ。

4 森泰吉郎『蚕糸業資本主義史』、81ページ。もともと、日露戦争よりも前からアメリカ市場における日本産生糸のシェアは5割を超えていたから、「米国需要の半額を日本が供給するに至つた事」をもって、日本産生糸が経糸としても使用されていたことの表れと解することはできない。

5 石井寛治『日本蚕糸業史分析』、46ページ。

6 石井寛治『日本蚕糸業史分析』、44ページ。

立っていたのであろう。

さて、日本産生糸が一時期の欧米市場で経糸として使われることはなかったという理解が広まる上で大きな役割を果たしたのは、1935年に刊行された『日本蚕糸業史』第2巻であった。同書は、リチャードソンとブリスンという2人のアメリカ人が1890年代に展開した主張を紹介しているが、この2人の主張には一時期の欧米市場において日本産生糸は経糸部門から締め出されたと受け取れる箇所が含まれていた。リチャードソンとブリスンの主張は、その後の研究の前提になったと考えられるので、やや長文ではあるけれども、引用しておこう。

まず、リチャードソンが日本の鬼頭副領事と面談した折に発した警告について、『日本蚕糸業史』第2巻は次のように伝えている。

「則続報米国紐育絹業協会書記長ビ、リチャードソンと鬼頭副領事との問答を見よ、本邦の製糸家が生糸の改良を後にして粗悪の生糸を巨額に製造する方利益ありとし精製を怠ることあらんか伊太利生糸は忽ち其機に乗じて日本生糸を蹂躪し取て以て之に代るべし事爰に至るときは日本生糸は僅に横糸若くは縫糸用の為に売却せらるゝに止まり随つて年々販路の減縮を来すべきや必せり云々当業者諸氏は斯の懇切なる箴規に接し如何なる感想を惹起すべき縦令一時は多額の粗糸に購買力ありとするも彼地機業家の需要上精粗の判別顯然たるに於ては忽ち之が信用を失し遂には精糸の声価にまで其の影響を及ぼし日本生糸の名声を汚すの不幸に陥るべし其れを思ひ之を想へば轉た慄然たるを覚ふるなり今や此報道を領つに当り特に当業者に向て注意を加へんとする要点を挙げれば

第一 織度を一樣ならしむること

第二 色沢を一樣ならしむること

第三 生糸毛羽立の憂ひなからしむること（後略）」⁷

なお、この引用文冒頭に「則続報米国紐育絹業協会書記長ビ、リチャードソンと鬼頭副領事との問答を見よ」とあるのは、鬼頭悌二郎副領事がリチャードソンから受け取った書簡の内容を本省に報告したのに続いて、リチャードソンと1891年11月28日に会食した折に交わした問答を続報として報告してきたことを指している。この時、2人は「長談殆ト4時間ニ垂レントセリ」というほど話し込んだといわれる⁸。それほどリチャードソンが熱心に話したことは、日本産生糸がアメリカ絹工業にとって欠かせないものであったことを示している。

さらに、1895年2月に農商務省は横浜生糸合名会社にアメリカ市場における日本産生糸の実況を調査するよう委嘱した。これに対して横浜生糸合名会社は、「其觀察ノ米国的ナランコトヲ期シ」で同社ニューヨーク支店員ブリスンに案文を書かせ、翌1896年2月に報告を提出した⁹。このブリスンの報告の梗概が、『日本蚕糸業史』第2巻に引用されている。即ち、

「貴邦〔日本〕は既に生糸製造に幾多の改良を施せり然れども米国機業家も亦幾多の改良を施さざる

⁷ 本多岩次郎編纂『日本蚕糸業史』第2巻、明文堂、1935年、121ページ。この原文は、農商務省農務局『明治二十八年調 輸出重要品要覧 農産部 蚕糸』、1896年4月3日、35-36ページに掲載されている。

⁸ 問答の内容自体は、農商務省農務局『明治二十八年調 輸出重要品要覧 農産部 蚕糸』、43-54ページに記載されている。

⁹ 「米国市場ニ於ケル日本糸ニ関スル意見」、農商務省農務局『第二次輸出重要品要覧 農産部 蚕糸』、1901年12月、113-114ページ。

を得ざるに至れり現今 [1896 年頃] 我国 [アメリカ] にて製造する絹物は之を 5 年前のものに比するに其品質は全く殊異にして其製造方法に至りても亦固より同しからず今其機業上の変化を以て日本製糸の改良に較ぶれば前者の遙に後者より大なるを見る可し又之れを換言すれば今日製造する佳良なる絹物に比して日本の生糸は遙に其後へに落ちたるものと謂ふ可し。日本糸の進歩は固より我輩の喜んで了する所なり然れども其 5 年以前に於て我 [アメリカの] 需要を充たしたるが如く今日に於て之れを充たす能はざるものあるを如何当時我 [アメリカの] 製造品も今日に比して劣等なりしかば屢経糸として使用せられたるも今や日本糸の産額前日の比に非らざるも専ら緯糸として使用せらるゝのみなり我 [アメリカの] 機業家は幾多の経験上日本生糸を称して恰好なる緯糸とす。我米國に於ては経糸は支那蒸汽機械及欧州糸之れを供給し緯糸は日本及支那糸之れを供給す (略) 日本糸は我米國に於て消費する生糸の 6 割を占むること久し若し夫れ改良の我 [アメリカの] 機業と歩武を同ふしたるものありて経糸として之を使用するを得ば大に販路を拡張するを得たりしならむ今や日本の製糸にして最上伊太利糸と同様の価格を得るもの僅に 3 4 の製糸家に属するものなり (略) 思ふに 5 萬 5 千俵に上る日本輸出高中米國へ輸入するものゝ内品位の均一なる上等品は僅々数百俵に過ぎざるべし云々」¹⁰

リチャードソンとブリーソンの主張は、後にさらに敷衍されることになった。一時期の欧米市場において日本産生糸は経糸部門から締め出されたという見解が複数の研究者によって唱えられ、ついには通説の域にまで達したのである¹¹。もっとも、経糸部門から締め出されたとされる時期については、論者によって多少の異同がある。しかし、後述するように、1890 年代後半のアメリカ市場で日本産生糸は経糸としてはほとんど使用されなかったと説く点では、論者の見解は一致している。かくして形成された通説の論点は多岐に亘っているので、以下ではいくつかの命題に分解した上で、その当否に検討を加えることにしよう。

2. 学説の整理と再検討

A 命題 1 「一時期の欧米市場で日本産生糸はほとんど経糸として使用されなかった。」

(1) リチャードソンの見解の検討

先に見たように、リチャードソンは「事爰に至るときは日本生糸は僅に横糸若くは縫糸用の為に売却せらるゝに止まり随つて年々販路の減縮を来すべきや必せり」と言ったと伝えられる。しかし、彼の言うことをよく読むと、単に仮定の話をしているだけで日本産生糸が「僅に横糸若くは縫糸用の為に売却せらるゝに止ま」る状態に実際に陥ったと言っているわけではないことがわかる。

(2) ブリーソンの見解の検討

ブリーソンは「今や日本糸の産額前日の比に非らざるも専ら緯糸として使用せらるゝのみなり」とか「我米國に於ては経糸は支那蒸汽機械及欧州糸之れを供給し緯糸は日本及支那糸之れを供給す」とか述

¹⁰ 本多岩次郎編纂『日本蚕糸業史』第 2 卷、122—123 ページ。

¹¹ 石井寛治『日本蚕糸業史分析』、40—56 ページ。Shinya Sugiyama, *Japan's Industrialization in the World Economy 1859-1899*, The Athlone Press, 1988, pp.77-139, pp.216-219. 小林真幸『近代資本主義の組織』、東京大学出版会、2003 年、179—239 ページ。

べたといわれる。しかし、こうした文言は、誇張であって事実を歪曲している。その証拠に、ブリーソンは別の箇所では捻糸業者から次の話を聞いたと述べている。

「捻糸屋リード、及、ロベット会社述べて曰く日本糸には2本揚り、細ムラあり又デニール不同にして益経糸に用ふるの望みを薄くし我が得意先の機業家にして現今日本糸を経糸として用ふるものも亦之れを廃し以太利糸を用ひんとするに至る日本にして速に改良を行ふにあらざれば経糸用として日本糸の需要は地を払ふ近きにあらんとすと」¹² (傍線は引用者による)

ここでブリーソンのいう「捻糸屋リード、及、ロベット会社」とは The Read & Lovatt Co.を指しているものと思われ、確かに実在していた¹³。なお、同社を経営していたリード (Jerome C. Read) は後に米国絹業協会会長に就任し、1909年には広東の製糸業者に対して警告書を送るよう提唱している。新井領一郎は、彼を評して「リード氏ですか、此人は捻屋でなかなか勢力のある人です」と述べている¹⁴。つまり、「捻糸屋リード」なる人物は、アメリカ絹工業にとって都合の良いように外国の産業を改造することに強い関心を持っていた人物なのである。ところが、同社からの伝聞という形をとってではあるが、アメリカの機業家の中には「現今日本糸を経糸として用ふるもの」がいることをブリーソン自身が認めているのである。この箇所が「緯糸は日本及支那糸之れを供給す」というブリーソンのもう一つの主張と矛盾していることは、明らかである。しかも「経糸用として日本糸の需要は地を払ふ近きにあらんと」との文言も現状では日本糸をまだ経糸として使用し続けていることを示唆しているように読める。ここでもやはりアメリカで経糸需要を失うことになるぞと脅しているだけで、実際にそうした状況に至ったと言っているわけではない。

確かに日本産生糸には「2本揚り、細ムラあり又デニール不同」という短所があったけれども、捻糸工程の中でも繰返し (winding) の工程に適しているという長所もあった。「捻糸屋リード、及、ロベット会社」は、日本産生糸のこうした長所には口をつぐんでいるのである。その反対に、上海産生糸、広東産生糸には纒の形状が繰返し工程に適しておらず稜角の固着も多いという短所があったけれども¹⁵、「捻糸屋リード、及、ロベット会社」は、こうした短所にも口をつぐんでいる。その主張は、公平を欠く偏った主張なのである。

しかも、「我米国に於ては経糸は支那蒸汽機械及欧州糸之れを供給し緯糸は日本及支那糸之れを供給す」というブリーソンの主張を突き崩す客観的な証拠が、まだある。1898年にアメリカの捻糸業者協会 (The Throwsters' Association) は、生糸を捻糸に加工する際に徴収する手数料の料率を引き下げた¹⁶。ここで新たに定められた料率 (第1表) を見れば、絹織物の経糸として使用されるオルガンジン (organzine) に加工された生糸と緯糸として使用されるトラム (tram) に加工された生糸の内訳がわ

¹² 「米国市場ニ於ケル日本糸ニ関スル意見」、農商務省農務局『第二次輸出重要品要覧 農産之部 蚕糸』、117ページ。

¹³ 1895年3月に同社が掲載した広告によれば、同社は手数料を取って生糸を捻糸に加工することを請け負う賃捻業者 (Commission Silk Throwster) であった。ペンシルヴェニア州のウィーザリィ (Weatherly) には生糸をオルガンジンに加工する工場があり、ニューヨーク州のエルミラ (Elmira) には生糸をトラムに加工する工場があった。またニューヨーク市のグランド街68番地に事務所を構えていた (*The American Silk Journal*, Volume 14 Number 3, March, 1895, p.43.)。

¹⁴ 新井領一郎「本邦製糸業家の一考を煩はす」、『大日本蚕糸会報』第222号、1910年8月20日、21-22ページ。

¹⁵ 三谷徹『最新製糸学』中巻、明文堂、1930年、851-852ページ。

¹⁶ "The Throwsters' Association Reduce Prices", *The American Silk Journal*, Vol.17 No.7, July, 1898, p.24.

かる。つまり、第1表から次の点を読み取ることができる。

第1表 撚糸加工賃 (1898年)

日本産生糸とイタリア産生糸をオルガンジンに加工する際の手数料	
織度	加工賃
15中(14/16)	65セント
14中(13/15)	70セント
13中(12/14)	75セント
12中(11/13)	85セント
11中(10/12)	90セント
日本産生糸とイタリア産生糸をトラムに加工する際の手数料	
織度及び種別	加工賃
15中(14/16)及び14中(13/15)、三子糸	35セント
15中(14/16)及び14中(13/15)、二子糸	40セント
日本産掛田糸をトラムに加工する際の手数料	
織度及び種別	加工賃
15中(14/16)及び14中(13/15)、三子糸	40セント
15中(14/16)及び14中(13/15)、二子糸	45セント
広東産生糸をトラムに加工する際の手数料	
種別	加工賃
三子糸	42.5セント以上
二子糸	47.5セント以上

(出所) *The American Silk Journal*, Vol.17 No.7, July, 1898, p.24.

①生糸を織物の経糸として使用されるオルガンジンに加工する際の手数料の項目において、日本産生糸はイタリア産生糸と並列され同じ扱いを受けている。従って、1890年代後半にあっても日本産生糸は、イタリア産生糸と同様に、経糸用のオルガンジンに加工されていたのである。第1表に照らせば、「経糸用として日本糸の需要は地を払ふ近きにあらん」との「撚糸屋リード、及、ロベット会社」の

指摘には根拠がなく、日本産生糸が緯糸にしかならなかったというブリーソンの主張が嘘であることは、明らかである。なお、筆者は、1898年にアメリカで最大の需要を獲得していたリボンの経糸として信州上一番格生糸が使用されていたことを示す史料を以前に引用したことがある¹⁷。

- ②オルガンジンに加工する際の手数料の料率で日本産生糸はイタリア産生糸の間に差がない。従って、オルガンジンへの加工のしやすさという点では、日本産生糸の品質は、1898年の段階で既にイタリア産生糸のそれと同等であった。
- ③織物の緯糸となるトラムに加工する手数料の料率がイタリア産生糸についても示されているから、イタリア産生糸を緯糸として使用する場合もあったことがわかる。
- ④トラムに加工する際の手数料の料率でも、日本産生糸とイタリア産生糸の間に差がない。従ってトラムへの加工のしやすさという点でも、日本産生糸とイタリア産生糸の品質は同等であったと考えられる。
- ⑤広東産生糸についてはトラムに加工する際の手数料だけが掲載されている。従って、広東産生糸は、専ら緯糸として使用されていたと考えられる。
- ⑥同様に、日本の掛田糸についてもトラムに加工する際の手数料だけが掲載されているから、専ら緯糸として使用されていたと判断される。
- ⑦トラムに加工する際の手数料の料率は、広東産生糸が最も高い。従って、トラムへの加工のしやすさに限っては、広東産生糸の品質が最も低かったと考えられる。
- ⑧第1表には上海産生糸に関する記載が全く見当たらない。上海産生糸については、オルガンジンに加工する手数料もトラムに加工する手数料も掲載されていないのであるから、上海産生糸は燃糸に加工されていなかったことがわかる。上海産生糸は、おそらく全量が生糸のまま一本経の原料として使用されていたものと考えられる。

従って、「我米国に於ては経糸は支那蒸汽機械及欧州糸之れを供給し緯糸は日本及支那糸之れを供給す」というブリーソンの主張のうちで、広東産生糸が専ら緯糸として使用されていたということと上海産器械糸が専ら経糸（おそらく一本経の材料）として使用されていたということは真実であるが、それ以外の点は史実に反していたことになる。つまり、日本産生糸とイタリア産生糸は、ブリーソンの主張とは異なり、アメリカでは経糸にも緯糸にも使用されていたのである。正確な統計を欠いているので経糸と緯糸の比率は不明であるが、おそらく日本産生糸では緯糸になる比率が高く、イタリア産生糸では経糸になる比率が高かったと思われる。そこで、事態を正確に表現すれば、次のような文言になるであろう。「アメリカで経糸として使用して製織工程でトラブルを起こさないのは、上海産生糸とイタリア産生糸である。日本産生糸は、経糸とするには適さない場合もあるけれども、実際は経糸としても使われている。緯糸として使用するのであれば、日本産生糸と広東産生糸でも問題はない」と。結局、ブリーソンは、事態を歪曲して横浜生糸合名会社に伝えたのである。「其観察ノ米国的ナランコトヲ期シ」て正確な調査を行おうとした横浜生糸合名会社の期待は、裏切られたことになる。

¹⁷ 拙稿「経糸考」、「京都学園大学経済学部論集」第15巻第3号、2006年、1ページ。なお、その史料には経糸に信州上一番格生糸を用い緯糸には広東産生糸を配することがあったことが記されている。

(3) 石井氏の見解の検討

石井氏は、「90年代後半からは(中略)日本生糸はしだいに経糸部面から締め出される破目に陥った。96年には日本糸は「専ら緯糸トシテ使用セラルルノミ」[ブリースンの言からの引用]と報告され、1899年には、アメリカ生糸市場での日本生糸のウエイトは、(中略)遂に40%ラインすれすれへ転落するという最悪の事態に陥った」¹⁸と述べている。石井氏が作成した表では、1899年のアメリカ市場における日本産生糸のシェアは42.3パーセントとなっている¹⁹。こうした記述を読むと、1899年は日本の製糸業者にとって悲慘な年であったかのような印象を受ける。しかし、筆者が別の史料に基づいて計算したところ²⁰、1899年のアメリカ市場における日本産生糸のシェアは重量ベースで47.3パーセント、金額ベースで47.6パーセントとなっており、シェアそれ自体の落ち込みは石井氏の推計ほど深刻でない。しかも、1899年は、実は稀に見る好況の年であった。『平野村誌』下巻は、その好況を「米佛[アメリカとフランス]の好況により1月以来糸価逐日高騰、2月1000円5月には1150円となる。そのため前年同業組合の決定を解除して3月18日から春挽開始のこととする。(中略)好況は尚持続11月には1300円に騰る。非常の好景気で業者は未曾有の利を収めた」²¹と描写している。

1899年が好況の年であったのは、1900年に開催が予定されていたパリ万博が絹製品に対する需要を喚起することを当て込んで、前もって在庫品を積み増す動きが生じたからである²²。この好況に煽られて生糸に対する需要は、1899年には異常に高まり、大量生産に長じた日本の蚕糸業ですら応じきれない程の水準に達した。そこで、アメリカの絹工業関係者が不足する生糸を日本以外の国からかき集めたために、日本産生糸のシェアが低下したのである。つまり、日本産生糸のシェアが1899年のアメリカ市場で幾分か低下したのは、この年に「パリ万博バブル」が生じる等の理由で生糸に対する需要が異常に盛り上がったために日本の蚕糸業ですら供給が追いつかなかったためであって、日本産生糸がアメリカで経糸部門から締め出されたためではない。

(4) 杉山氏の見解の検討

杉山氏は、石井氏とほぼ同じ立場に立っているものと見られる。

(5) 中林氏の見解の検討

① 相対価格による用途の判定の是非

中林氏は、イタリア器械糸(“No.1”と“Best No.1”)や上海器械糸(“2nd Choice”)に対する信州上一番格糸(“Japan No.1”)の相対価格を基準にして、信州上一番格糸が経糸であったか否かを判定している²³。即ち、「経糸需要をイタリア糸と上海器械糸に奪われた1890年代半ばに相対価格はいずれも1.0を下回る一方、1900年代には再び1.0を超えている」ことを指摘し、ここから「1890年代半ばまで」と「1900年代初頭から半ばまでの時期において“Japan No.1”,すなわち「信州上一番」格は、

¹⁸ 石井寛治『日本蚕糸業史分析』、45ページ。

¹⁹ 石井寛治『日本蚕糸業史分析』、43ページ。

²⁰ Silk Association of America., *28th Annual Report of the Silk Association of America*, March 27th, 1900, p.88.

²¹ 平野村役場『平野村誌』下巻、1932年、295ページ。

²² 本多岩次郎編纂『日本蚕糸業史』第1巻、1935年、224ページ。

²³ 信州上一番格生糸がアメリカでNo.1と格付されていたことについては、細川幸重『生糸の格と製糸法』増訂改版、明文堂、1919年、52ページ等が言及している。

すくなくとも中下級織物の経糸用途糸として需要されたと考えてよいであろう。ところが、1907年の景気後退の際に日本糸の相対価格は下落し“Japan No.1”は経糸用途から再び転落した²⁴との結論を引き出している。さらに、「すくなくとも、諏訪郡の主要製糸家の有名商標糸は、アメリカ市場において品質を適正に評価され、1910年代には経糸需要を回復したものと思われる」として、「諏訪郡の主要製糸家の生糸は、1890年代後半と1900年代末頃を除く、発展過程の大部分の期間において、中下級織物の経糸の原料糸として需要されたと考えられる」と総括している²⁵。従って、石井・杉山・中林の三氏は揃って1890年代後半に日本産生糸（とりわけ信州上一番格生糸）がアメリカ市場で経糸として使用されていたことを否定していることになる。

このように相対価格が経糸であったか否かを判定する基準となると解している点では、実は中林氏は石井氏と共通の理解に立っている。石井氏は、「1903・1904年頃から、日本糸の価格水準がフランス糸のそれを上回り、イタリア糸の価格に著しく接近した事実」を指摘し、このことが「いったん経糸部面から締め出されかかった日本生糸が、再び経糸部面に進入し始め」たことの裏付けになるとの理解を示しているからである²⁶。

これに対して、筆者は、相対価格は経糸用途か否かを判定する基準にはなり得ず、信州上一番格生糸も含めて日本産生糸がアメリカ市場で経糸用途から締め出されたことは一度もなかったと考えている。価格は、需給その他の要因によっても変動し、経糸か否かだけによって左右されるものではないからである。例えば、1908年に信州上一番格生糸の価格が下落して飛切優等格生糸との価格差が200円以上広がった一因は、流行がタフタから去ったためにタフタの緯糸として最も多く使用されていた信州上一番格生糸に対する需要が減少したことにある²⁷。このように価格は様々な情報を集約して決まるため、「雑音」まで拾ってしまうから、ある生糸が経糸として使用されたか否かを判定する「ものさし」として適切ではない。

しかも、日本産生糸とイタリア産生糸は、アメリカで織物の色合いや厚薄に応じて「住み分け」を行っていたから²⁸、各々がテリトリーとしている分野が流行するか否かによって、その相対価格が変動していたと考えられる。この点でアメリカの絹業界誌 *The American Silk Journal* に1905年に掲載された「生糸に関する質問」というコラムは、貴重な情報を提供してくれる。「当国 [アメリカ] では日本産生糸に対する需要はイタリア産生糸に対する需要より大きいか」との質問に対して、「需要は、生糸の用途によって支配される。例えば、黒色の織物の生産が問題になっているのであれば、良い黒色を出すために用いられる工程に対する親和性が高いイタリア産生糸が好まれる。色物、特に淡いクリーム色のような繊細な色合いの織物を生産するには、日本産生糸が好まれる。というのも、イタリア産 [黄

24 中林真幸『近代資本主義の組織』、212ページ。

25 中林真幸『近代資本主義の組織』、213ページ。同書180—181ページも同旨。

26 石井寛治『日本蚕糸業史分析』、46ページ。

27 「一昨年 [1908年] 上一番物と飛切物との値段が200円も差のあつたは、当時「タフエタ」織の流行が衰微して其緯糸に最も多く供せらるゝ上一番の需要が減した実例もある」（今西直次郎「再び欧州に於ける本邦優等生糸の需要に就て」、「大日本蚕糸会報」第220号、1910年6月20日、10ページ。）

28 拙稿「経糸考」2—4ページ。「金子堅太郎君の演説」、「大日本蚕糸会報」第93号、1900年3月、6—7ページも「住み分け」に言及している。

繭] 糸の黄色は、簡単には消えないからである」との答えが示されているのである²⁹。従って、日本産生糸は、そのテリトリーとしていた淡色物や薄物が流行する時には、値上がりしたであろう。その反対に、イタリア産生糸のテリトリーになっていた濃色物や厚物が流行すれば、イタリア産生糸の価格は上昇することになるであろう。必ずしも経糸が緯糸に対応して相対価格が変化したわけではない。

さらに、ラウジネスの有無が、日本産生糸とイタリア産生糸の相対価格に影響を及ぼすこともあった。筆者は、1900年代初めのアメリカ市場で日本産生糸の価格がイタリア産生糸の価格を上回っていた事実を指摘したことがある³⁰。しかし、この事実は、それまで経糸部門から締め出されていた日本産生糸が経糸部門に進出したということの意味しているのではない。1890年代後半にも日本産生糸は経糸としても使用されていたから、1900年代初めの日本産生糸の相対価格の上昇は日本産生糸が経糸として使用され始めたことを告げるものではない。1900年代初めのアメリカ市場で日本産生糸の価格がイタリア産生糸の価格を上回ったのは、実はイタリア産生糸にラウジネスが発生したことを反映しているのである。これに対して当時の日本産生糸にはラウジネスが発生してはいなかった。三井物産ニューヨーク支店員であった田島繁二は、大日本蚕糸会で行った演説において次のように述べている。

「此「ラウジネス」と云ふものは日本糸ばかりでなく伊太利糸にもあります、上海糸には未だ出た事はありません、昔から伊太利〔イタリア〕糸にもありますが、此頃〔1915年頃〕は減つて来て居ります、伊太利には今から十四五年前〔1900年から1901年頃〕に大分出ました、其時分には日本糸には無かつたので、それで〔アメリカ市場で〕急に日本糸が増したと云ふ歴史があります。」³¹（傍線は引用者による）

同じ趣旨の文章が『日本蚕糸業史』第2巻にも掲載されているが³²、傍線を付した部分は省略されている。つまり、ラウジネスの有無が日本産生糸とイタリア産生糸の競争にどのように影響したのかという観点が、『日本蚕糸業史』第2巻ではすっぱり抜け落ちているのである。しかし、1900年にラウジネスが発生したために、イタリア産生糸は、「レモン」（「欠陥商品」の意）になり、アメリカ市場で競争力を失ったことを強調しておかなければならない。これを見ても、日本産生糸とイタリア産生糸の相対価格が日本産生糸が経糸として使用されていたか否かを判定する基準にならないことがわかる。

なお、イタリア産生糸にラウジネスが発生したことが1900年代初めのアメリカで問題になった時、日本人はそのことを知らなかった。1900年代に発行された「大日本蚕糸会報」にも「蚕業新報」にもラウジネスに関する記事は見当たらない。おそらく当時のアメリカ人は口をつぐんで日本側にこの事実が伝わらないようにしたのであろう。通説とは反対に日本産生糸の欠点は1900年代にも日本側によく伝わっていたが、イタリア産生糸の欠点は伝わってはいなかったのである。日本の蚕糸業関係者を牽制

²⁹ “Questions about Raw”, *The American Silk Journal*, Vol.25 No.12, December, 1905, p.48.

³⁰ 拙稿「アメリカ市場における蚕糸業の国際競争について（1900—1925年）」、『経済学研究』第18号、1985年、4ページ。

³¹ 三井物産紐育支店員 田島繁二「ラウジネス問題」『大日本蚕糸会報』第281号、1915年6月1日、25ページなお、1915年頃から日本産生糸にもラウジネスが出るようになったのは、1910年代に入ると日本でもヨーロッパ種の系統を引く蚕が盛んに飼育されるようになったためであろう。日本に最初にヨーロッパ種の蚕が導入されたのは1900年のことであったが、その後紆余曲折を経て普及した。日本におけるヨーロッパ種の普及とラウジネスの発生が時期的に重なっていることからすれば、日本産生糸でもラウジネスが発生するようになったのはヨーロッパ種を導入したためだと考えられる。

³² 本多岩次郎編纂『日本蚕糸業史』第2巻、127—128ページ。

する材料がなくなれば、日本側が生糸価格の引き上げに動いても止められなくなることを警戒してアメリカ側は口をつぐんだのだと考えられる。ここにもアメリカ側の情報操作の一例があり、同時に日本側の情報収集力の不足が示されている。

②1900年代末における信州上一番格生糸の用途

先に見たように中林氏は「1907年の景気後退の際に日本糸の相対価格は下落し“Japan No.1”は経糸用途から再び転落した」と説くが、実際には信州上一番格生糸は、1900年代末には経糸としての適性を高めていた。レオ・デュランは、1909年12月に掲載された記事の中で、「以前は横浜の一番半はオルガンジンとするには十分ではないと考えられていた。しかし、ここ2、3年来、撚糸業者は、そうした用途〔経糸に充てるオルガンジン用〕に適した商標の生糸もあると考えている」³³と述べている。ここで「横浜の一番半」（原文は Yokohama No.11/2）とは、信州上一番格生糸を指す。横浜の蚕糸外四品取引所で「一番半」に格付された生糸とは、信州上一番格生糸であったからである³⁴。レオ・デュラン自身も別の記事の中で、蚕糸外四品取引所で「一番半」に格付される生糸の生産者として尾澤、林、山十、三井、岡谷、白鶴、丸山等（原文は、No.11/2一（Yokohama Silk Exchange Standard）—Ozawa, Hayashi, Yamajiu, Mitsui, Okaya, Shinoto, Hakutsuru, Maruyana, Takenchi, etc.）を挙げており³⁵、ここでいう「一番半」が信州上一番を指していることは明らかである。

このレオ・デュランの指摘は、なかなか意味深長である。「以前は横浜の一番半はオルガンジンとするには十分ではないと考えられていた」という微妙な言い回しからは、以前は経糸用のオルガンジンに加工するには信州上一番格生糸の品質は十分ではないことはわかっていたけれども、それでも実際は無理を承知でオルガンジンとしても使用していたのだということを示唆しているように読める。しかも、レオ・デュランによれば、「ここ2、3年来」、つまり1907年頃からは、信州上一番格生糸の中でもある商標を貼付された生糸は経糸用のオルガンジンに加工するに適していることを撚糸業者が認めているというのである。さて、ここでレオ・デュランのいう「そうした用途に適した商標の生糸」の商標が原商標であったのか私商標であったのかは、不明である。しかし、実質的には、片倉組が生産していた生糸がこれに含まれていたのであろう。片倉組総支配人を務めていた今井伍介によると、信州では、かつては生糸の色沢をよく見せるために、繰糸釜の繰湯が溢れるがままにして繰糸していた。そのために繰湯の表面に浮いたセリシンも流れ出して生糸に残るセリシンが減ったために、生糸の強伸力を損なっていた。しかし、アメリカの絹織物製造業者が実際には色沢を重視していないことがわかったので、1907年頃から繰糸釜の下から繰湯を抜くようになった。そのために生糸に残留するセリシンの量が増え、生糸の強伸力が向上した（但し練減は増えた）³⁶。かくして強伸力が向上したので、信州産生糸は、経糸

³³ Leo Duran, "The Improvement of Japanese Raw Silks", *Silk*, Volume 3 Number 2, December, 1909, p.24.

³⁴ 「取引所の標準物は信州太一番格物である、乍併、此一番格と云ふは昔の話で今日ではだんだん生糸も改良し、価格も上進して来て、今日取引所で一番格と云ふは、即ち〔信州〕上一番格の事である、又実際信州太上一番格物の生糸の売れ高は最も多数である。」（生糸検査所技手 徳田実也「生糸の取引は如何にして行はるゝか（承前）」、「大日本蚕糸会報」第183号、1907年8月20日、8ページ。）横浜蚕糸外四品取引所の「銘柄及受渡規定摘要」では「器械製糸太糸之部」の「老番半」とは、「デニール並通称呼」が14半、「デニール平均」が14ないし15、「デニール区域」が12半より16半の生糸とされていた（藤本実也『開港と生糸貿易』下巻、刀江書院、1939年、346-347ページ）。

³⁵ Leo Duran, "Japanese Raw Silks The Question of Private Chops", *Silk*, Volume 2 Number 2, December, 1908, p.38.

³⁶ 片倉組総支配人 今井伍介氏談「練減の増加は不正行為の為にあらず」、「大日本蚕糸会報」第248号、1912年9月1日、41-42

としての適性を高めたのである。片倉組がこのような繰糸法の改善を行ったのは、1907年恐慌後の不況に対応するために沈繰法等を研究する過程で色沢を重視する必要がないことに気付いたためではないか。沈繰法によって挽いた生糸は、色沢は良くないが、製織工程に掛けた際に表れる生糸の実質的品質は高かったからである。なお、好況で売り手市場になると品質を切り下げ不況で買い手市場になると品質を向上させるという信州の製糸業者の行動パターンは、1907年恐慌に伴う不況下で信州上一番格生糸が繰糸としての適性を高めていた事実とよく符合する。ともあれ、1907年恐慌を契機として信州上一番格生糸の価格は暴落したけれども、実際の品質は向上しており、繰糸とするに適しているとの評価をアメリカで受けていたのである。

さらに、アメリカ市場における日本産生糸の用途全般について、レオ・デュランは、「[繰糸用の]オルガンジンとなるのは、主としてリボン用のダブル・エキストラとエキストラ、それにベスト・ナンバーワンと少量のナンバー・ワンである。その全てが広幅物の繰糸となる(原文はAll of them make the warp of broad good.)。ナンバー・ワン以下の格の生糸から作られるトラムは、普通の緯糸とするのに適している(原文はTrams from No.1 and below make a good to ordinary filling.)」³⁷と記している。つまり、1900年代末のアメリカ市場で信州上一番格生糸は、リボン(狭幅物)用の繰糸としては少量が使用されただけであるが、広幅物では繰糸として使われて当然という状態にあったのである。比較的格付の低い信州上一番格生糸ですら、広幅物の繰糸になっていたと1909年にレオ・デュランは明言しているのである。しかも、1913年に公開された書では、「全てのアメリカの製造業者は、その織物を織るのに日本産生糸を使用している。彼らのうちの半数は、他の生糸を使っていない」³⁸と述べている。従って、1910年代初めには、アメリカの絹織物製造業者の半数は、繰糸にも緯糸にも日本産生糸を使っていたことになる。

日本側の史料にも信州上一番格生糸が1900年代末に繰糸として使用されていたことを示すものがある。生糸検査所技師であった足立元太郎は、1909年に「上一番格の生糸は重に大製糸家の製産品で、横浜の市場には此種の生糸の絶る事が無いために横浜市場の標準物と成つて居るので御座ります。近來此種の生糸の改良された物もあつて上出来の品は或種の織物の経にも使用せらるゝと云ふ事ですが、並の品は緯糸の原料には勿論裁縫編物糸等其他種々の用途に使用せらるゝので、需用は極めて廣い品ではあります」³⁹(傍線は引用者による。)と述べている。

紫藤章は、1900年代末のアメリカにおける日本産生糸の繰糸の比率を51%と見積もっているが⁴⁰、石井氏はこれを過大評価として退ける⁴¹。紫藤自身も「一昨年[1908年]ヨリ昨年[1909年]ニ掛ケテ絹棉交織ナル中等織物ノ流行ノ為メ其性質上日本生糸ハ割合ニ多く繰糸ニ供セラレタルハ疑フベカ

ページ。

³⁷ Leo Duran, "The Improvement of Japanese Raw Silks", *Silk*, Volume 3 Number 2, December, 1909, p.24.

³⁸ Leo Duran, *Raw Silk A Practical Hand-Book for the Buyer*, Silk Publishing Company 1913, p.140.

³⁹ 足立元太郎「本年の生糸相場に就て」、『大日本蚕糸会報』第213号、1909年12月20日、35ページ。

⁴⁰ 農商務省生糸検査所『米国絹業談』、1910年、65ページ。紫藤の推計は、三谷徹『製糸学』下巻、明文堂、1919年、693-694ページでも引用されている。

⁴¹ 石井寛治『日本蚕糸業史分析』、47ページ。

ラズ」⁴²と記して、経糸の比率が例年よりも高く出ていることを認めている。しかも、紫藤の推計は、手袋（その実質は編物）や編物用に使用された分も経糸に含めるという誤りを犯している。編物には経糸と緯糸の別がないから、編物用に使用された生糸を経糸用に含めることはできないのである。しかし、1900年代末のアメリカでは編物の生産量はまだまだ大きくはなかったから、編物の分を差し引いても紫藤の推計は、むしろ実態に近いのではないかと。

③ベスト・ナンバー・ワン以下のイタリア産黄繭糸の用途

先に見たように、信州上一番格生糸がアメリカで経糸として使用されていたか否かを判定するために中林氏はイタリア器械糸（“No.1”と“Best No.1”）と信州上一番格糸（“Japan No.1”）の相対価格を用いている。しかし、ベスト・ナンバー・ワン（Best No.1./上一番）やリアリナ（Realina）といった低い格付のイタリア産黄繭糸は、アメリカではごく限られた量が使用されただけである⁴³。なお、リアリナと呼ばれた生糸は、汚れ繭から繰糸した粗悪な糸であった⁴⁴。しかも、ベスト・ナンバー・ワン以下のイタリア産黄繭糸は、織度が15中以上のものを絹綿交織物の経糸として使用しただけであった。「ベスト・ナンバー・ワン（Best No.1./上一番）とリアリナ（Realina）は、経糸となって絹綿交織物用に綿工場の男巻（beams）に売られていく。その織度は、15中（14/16）以上である」⁴⁵とレオ・デュランは説明している。ここで男巻とは、織機の部品であって、製織準備工程で経糸を巻き取っておく役割を果たす。男巻から順次送り出した経糸に緯糸を通して織物を織っていくのである。つまり、ベスト・ナンバー・ワンやリアリナといった低い格付のイタリア産黄繭糸は確かに経糸として使われてはいたが、綿工場で絹綿交織物の経糸として使用されていたのである。紫藤章も「聞く処に依れば「ニューイングランド」地方に於ける、従来木綿織物の盛なる地方では、昨年[1909年]は木綿機の機台を利用して絹綿交織物を織つたと云ふが、更に本年[1910年]に至つては新に千何百台の機台を増して盛に絹綿交織の業を起さんとしつゝありと云ふことである」⁴⁶と報告している。なお、付言すれば、ベスト・ナンバー・ワン以下の低い格付の生糸とはいえ、イタリア産黄繭糸は糸質が強かったから、綿工場で絹綿交織物の経糸として使用されたのであろう。綿は天然繊維の中でも最も強靱であるから、力織機の応用も18世紀にまず綿織物から始まった。これに対して絹は天然繊維の中で最も脆弱であるから、力織機を使って絹織物を織るようになったのは、19世紀半ば頃からである。強靱な綿を扱うことに慣れていた綿工場で絹を利用するのであれば、絹の中では強靱なイタリア産生糸でなければならなかったのであろう。なお、1900年代末にイタリア産生糸のアメリカ向け輸出が伸びているのは、絹綿交織物がアメリカで流行するのに伴って、その経糸となるベスト・ナンバー・ワン以下のイタリア産生糸に対する需要が伸びたためであろう。

⁴² 紫藤章『米国絹業談』、66ページ。なお、この文章は、絹綿好色物が流行して純絹織物の売行きが落ちたために、純絹織物の緯糸需要の一部を日本産生糸が失った結果、相対的に経糸の比率が高くなったという意味に解すべきである。

⁴³ 「ベスト・ナンバー・ワン（Best No.1./上一番）の品質のイタリア産黄繭糸とリアリナ（Realina）のような低い格付のイタリア産黄繭糸は、オルガンジン用にほんの少量がアメリカに輸入されるに過ぎない。」（Leo Duran, *Raw Silk A Practical Hand-Book for the Buyer*, p.144.）

⁴⁴ 細川幸重『生糸の格と製糸法』増訂改版、41-42ページ。

⁴⁵ Leo Duran, *Raw Silk A Practical Hand-Book for the Buyer*, p.141.

⁴⁶ 紫藤章「米国絹業談」、「大日本蚕糸会報」第216号、1910年3月10日、4ページ。

従って、ベスト・ナンバー・ワン以下のイタリア産黄繭糸は、日本の信州上一番格生糸のように純絹の絹織物を織るために使われたわけではない。アメリカで純絹絹織物を織るのに利用されたイタリア産生糸は、エキストラ・クラシカル格やクラシカル格といった格付の生糸であった。それゆえ、信州上一番格生糸がアメリカで経糸として使用されていたか否かを判定する基準としてニューヨーク市場における Japan No.1 (信州上一番格生糸) と Italian No.1 ないし Italian Best No.1 の相対価格を用いることはできない。ベスト・ナンバー・ワン以下の格付のイタリア産生糸と信州上一番格生糸は、アメリカで用途をはっきりと異にしていた。純絹絹織物を織るために使用されていた Japan No.1 と絹綿交織物を織るために使用されていた Italian No.1 ないし Italian Best No.1 が、同じ土俵の上でアメリカの経糸需要を奪い合うことはなかったから、両者の相対価格を基準にして Japan No.1 (信州上一番格生糸) が純絹絹織物の経糸となっていたか否かを判定することはできないのである。もともと、絹綿交織物の流行は、別の意味で信州上一番格生糸の価格に大きな影響を及ぼした。これについては項目を改めて後に検討することにしよう。

(6)付記

フランスでも日本産生糸が経糸としても使用されていたことを示す史料を付記しておこう。サン・テチエンヌで日本産生糸がリボンの経糸として用いられていたとの指摘が、1908年になされている。「抑もサンテンチエンヌ市はリボン製造の名産地にして里昂 [リヨン] に次での機業地たるは世人の能く知る処なるがリボン経糸用として我日本蚕糸の消費高は実に少からず」⁴⁷とあるのが、それである。日本産生糸は、ヨーロッパでも経糸として使用されていた。

結局、「一時期の欧米市場で日本産生糸はほとんど経糸として使用されなかった」という命題は、偽である。

B 命題2 「アメリカの経糸需要は、イタリア産生糸や上海産器械糸によって奪われた。」

(1)論点の整理

『日本蚕糸業史』第2巻によれば、リチャードソンは「伊太利生糸は忽ち其機に乗じて日本生糸を蹂躪し取て以て之に代るべし」と述べ、ブリースンは「我米国に於ては経糸は支那蒸汽機械及欧州糸之れを供給し緯糸は日本及支那糸之れを供給す」と述べた。

石井氏は、「今ニシテ若シ必要ノ改良ヲ中止スルコトアランカ、忽チニシテ伊太利糸ハ其機ニ乗シテ日本糸ヲ蹂躪シ取テ以テ之ニ代ルヘシ」というリチャードソンの「警告」(実は単なる脅し)を『輸出重要品要覧』から引用した上で、「リチャードソンの警告は適中し、90年代を通じてアメリカ合衆国へのイタリア糸の輸出は(中略)著しく増大した。そして、90年代後半からは(中略)上海器械糸のアメリカ市場への進出も始まり、これら両者の圧迫を受けて、日本産生糸はしだいに経糸部面から締め出される破目に陥った」⁴⁸と述べている。杉山氏は、1890年代のアメリカ市場ではフランス産生糸・イタリア産生糸・上海産器械糸が経糸として使用される一方で、日本産生糸は緯糸へと転落し、上海産器械糸

47 「大日本蚕糸会報」第197号、1908年9月20日、56ページ。

48 石井寛治『日本蚕糸業史分析』、44-45ページ。

以外の中国産生糸はミシン糸や縫い糸になっていたとの見解を図示してみせた⁴⁹。中林氏は、「1894年頃から、経糸需要は中国上海産の器械糸とイタリア器械糸に移動してしまう」⁵⁰との見解を示している。このように日本産生糸はイタリア産生糸や上海産器械糸によってアメリカの経糸需要を奪われたと考える点で、多くの論者の見解は一致している。

(2) リチャードソンの見解の検討

実はリチャードソンは、通説的理解とは全く逆の予言もしている。日本の在ニューヨーク副領事であった鬼頭梯二郎宛て 1891年 11月 16日付け書簡の中で、リチャードソンは日本産生糸が改良されたことを賞讃しつつ、なおも次の4項目で改良の余地があるとして日本産生糸に残る欠点を列挙することを忘れなかった。その欠点とは、

- ①生糸が強力と伸度に富むようにすること（原文では「第一 生糸ノ強弾力ノ事」）
- ②生糸に類節がないようにすること（原文では「第二 生糸ノ清麗ナル事」）
- ③生糸の織度を揃えること（原文では「第三 生糸ノ細粗一定ナル事」）
- ④生糸の色沢に斑がないようにすること（原文では「第四 生糸ノ色沢異同ナキ事」）

の四項目を指す。

ところがリチャードソンは、「日本製糸家ニシテ右ノ諸項ニ改良ヲ加ヘテ怠ラサルニ於テハ当米國生糸市場を蹂躪シ得テ之ヲ其壟斷ニ歸セシムルヲ得ヘシ」と付け加え、こうした欠点を直せば日本の製糸業者がアメリカ市場を蹂躪し独占することも可能だという見通しを述べているのである⁵¹。

しかも、鬼頭副領事と面談した折に、リチャードソンは次のように語っている。

「抑モ日本ハ其生糸改良上ニ今日迄ノ結果ヲ呈シタルニ付テハ揚々誇ルニ余リアリ去レハ自今尚ホ依然当米國機織器械ノ進歩ニ応シ併セテ絹業ノ必要ヲ察シテ日本生糸改良ヲカメテ怠ラサルニ於テハ欧州産ノ生糸ハ米國ノ生糸市場外ニ駆逐セラルハコト必然疑フ可カラス請フ試ニ其適例ヲ示スヘシ彼佛國ノ如キハ是迄著額ノ生糸ヲ産出シタル国柄ナルニモ拘ハラス其産額毎十年減退スルヲ知ラスヤ是ニ由テ之ヲ觀レハ蓋シ佛國ハ今日ノ勢ニテハ其蚕糸業ヲ挙ケテ廢停スルノ日モ或ハ遠キニアラサルヤノ觀ナキニアラス依テ退テ考案スルニ若シ夫レ日本ニシテ其全力ヲ挙ケテ正実信スルニ足ル生糸ヲ製造スルノ事ニ銳意怠ラサルニ於テハ欧州ノ蚕糸國ハ日本ト競争シテ収支相償フコトヲ得ルモノナカルヘシ」⁵²

石井説は、リチャードソンの発言の中から「伊太利生糸は忽ち其機に乗じて日本生糸を蹂躪し取て以て之に代るべし」という箇所を抜き出すことによって構成されている。しかし、同じ時にリチャードソンは、「日本生糸改良ヲカメテ怠ラサルニ於テハ欧州産ノ生糸ハ米國ノ生糸市場外ニ駆逐セラルハコト必然疑フ可カラス」とか「佛國ハ今日ノ勢ニテハ其蚕糸業ヲ挙ケテ廢停スルノ日モ或ハ遠キニアラサルヤノ觀ナキニアラス」とか述べ、日本のためにヨーロッパの生糸がアメリカ市場から駆逐されるだろうと全く逆の事態が生じることも予言しているのである。リチャードソンが述べた相矛盾する二つの予言

⁴⁹ Shinya Sugiyama, *Japan's Industrialization in the World Economy 1859-1899*, p.219. Table 7-2

⁵⁰ 中林真幸『近代資本主義の組織』、190ページ。

⁵¹ 農商務省農務局『明治二十八年調 輸出重要品要覧 農産部 蚕糸』、40-41ページ。なお、同書80ページもほぼ同旨。

⁵² 農商務省農務局『明治二十八年調 輸出重要品要覧 農産部 蚕糸』、46-47ページ。

のうちの的中したのが後者の方であったことは、その後の展開に照らせば明らかであろう。アメリカ市場における日本産生糸のシェアは、1924年には重量ベースで86.4パーセントの高みに達したからである。同年のイタリア産生糸のシェアは1.9パーセントにまで落ち込み、フランス産生糸に至っては0.3パーセントというほとんど取るに足りないシェアしか取れなかった⁵³。通説は、日本産生糸にとって不利な情報ばかりを選んで構成されているため、過度に悲観的な色彩を帯びている。通説の誤りを正すために、通説の信奉者から見れば楽観的に見える見解を対置すべき時がきたようである。その意味で筆者は悲観説に代えて楽観説を唱えるものである。

しかも、「伊太利生糸は忽ち其機に乗じて日本生糸を蹂躪し取て以て之に代るべし」とのリチャードソンの予言が単なる脅しでしかないことを証するもう一つの史料がある。1893年にアメリカのシカゴで開催された博覧会を参観した日本側関係者の一人に田原休之丞なる人物がいる⁵⁴。彼は当地でリチャードソンに会ったらしく、帰国後に大日本蚕糸会第3回大集会で演説した際に、リチャードソンから次の話を聞いたと証言している。

「日本の生糸の悪いことを、度々人の耳に入れるのも、幾分か御参考にならうと思ひますから本の僅かの大鉢だけを御話して演壇を下らうと思ひます、其言ふた所の話はどんな事であるかと云ふと、日本の製糸家は生糸を製造する所の費用を出来るだけ減少しやうと云ふ考へがあるために、上等糸を拵へるより寧ろ下等品を拵へるやうになつたのは近頃のことであるが、ソリヤ非常に誤ソて居るさう云ふ馬鹿な話はない、上等の糸を作れば亜米利加の機屋は喜んで使ふから、輸入も増し実に喜ぶべきことである、夫に反して下等の糸を段々拵へるから機屋の信用を失つたので、遂に日本の生糸が米市場を去つて仕舞つて、或は支那ベンガルと云ふ地方の糸が遂には日本の生糸の現在の有様を奪ひ取つて仕舞ふだらうと云ふことを言つて居ります」⁵⁵（傍線は引用者による）

つまり、田原休之丞はリチャードソンに日本産生糸は中国やインドのベンガル地方の蚕糸業のためにアメリカ市場を奪われるだろうと言われたというのである。『米國輸出本邦生糸雜駁ノ事實調査 在米國紐育帝國領事報告』に「從來日本生糸ヲ愛顧セシ機屋ニ於テ次季節〔一八九四年〕ニ於テハ或ハ一轉シテ支那若クハ「ベンガル」糸等ヲ使用スルニ至ルモ測リ難キノ傾向アレハ本邦ノ製糸家ハ須ラク猛省シテ精良ノ生糸ヲ製出シ米國市場既得ノ位置ヲ失墜セサラシムトヲ務ムベシ」⁵⁶（傍点は原文のまま。傍線は引用者による。）とあるのも、実はリチャードソンの受け売りであろう。ところが、当のリチャードソンは、副領事の鬼頭には「支那糸ハ当分敢テ恐ルハニ足ラス」⁵⁷と述べて中国は脅威ではないと明言しており、相手によって主張を変えているのである。

しかも、イタリア産生糸・中国産生糸・ベンガル地方産生糸はそれぞれ品質をかなり異にしていたか

⁵³ 拙稿「アメリカ市場における蚕糸業の国際競争（1900—1925年）」、13ページ。なお、絹織物には様々な種類や等級のものがあり、それに応じて様々な品質の生糸が要求されることを考えると、日本産生糸のシェアが86.4パーセントに達したことはむしろ驚くべきことである。

⁵⁴ 田原休之丞「米國の絹業」、「大日本蚕糸会報」第23号、1894年5月、5ページ。

⁵⁵ 田原之丞「米國の絹業（承前）」、「大日本蚕糸会報」第24号、1894年6月、13—14ページ。傍線は引用者による。なお、田原は、「今申上た所が私がリチャードソン氏から聴いた話の大鉢である」（同、16ページ）と述べて、演説を締め括っている。

⁵⁶ 農商務省農務局『米國輸出本邦生糸雜駁ノ事實調査 在米國紐育帝國領事報告』、1894年1月23日、111—112ページ。農商務省農務局『明治二十八年調 輸出重要品要覧 農産部 蚕糸』、67ページに採録。

⁵⁷ 農商務省農務局『明治二十八年調 輸出重要品要覧 農産部 蚕糸』、47—48ページ。

ら、こうした生糸がアメリカ市場から日本産生糸を駆逐することになるだろうという主張は相互に矛盾している。さらに、1891年から1895年までの平均で見ると日本産生糸の輸出量が300万6千キログラムに達していたのに対してベンガル産生糸の輸出量は僅かに26万1千キログラムしかなく⁵⁸、ベンガル産生糸が日本産生糸に取って代わることなどそもそも量的に不可能であった。リチャードソンにとっては、日本の競争相手として示す例はイタリアでも中国でもインドのベンガル地方でも何でもよかつたのであろう。リチャードソンの話には真実も確かに含まれていたが、その反面で学問的検証には耐えない主張も含まれていた。このように時人が虚実取り混ぜた主張をしている以上、虚と実を見分けることは、後世の歴史家が果たすべき任務である。

(3) 代替可能性

「アメリカの経糸需要はイタリア産生糸や上海産器械糸によって奪われた」という命題は、日本産生糸とイタリア産生糸や上海産器械糸の間に代替関係があることを前提としている。しかし、両者の間には弱い代替関係しかなかった。

1890年代から1900年代にかけては、日本産生糸が主に白繭糸から成っていたのに対して、イタリア産生糸は主に黄繭糸から成っていた⁵⁹。白繭糸が薄物や淡色物に適していたのに対して、黄繭糸は厚物や濃色物（特に黒色の絹織物）に適していたから、アメリカ市場で日本産生糸とイタリア産生糸には各々のテリトリーがあり、両者は「住み分け」を行なっていた。従って、日本産生糸とイタリア産生糸の間の代替可能性は低かつた。紫藤章の次の報告を引用することによってこのことを確認しておこう。

「欧州黄色生糸の濃色染黒色染に適し、日本白色生糸の薄色染に適して居るとは染色業者の従来唱ふる所であるが、之は強ち日本生糸が黒染に適せぬと云ふよりも、寧ろ其強力に乏しく且つ抱合が堅固でない為め、染色業者の慣例として常に使用する加重剤の分量に依りては其質を弱くするか為め斯く言ふのではあるまいか、現に黄色生糸を経とし、我か白色生糸を緯として織上げたる黒染織物は経緯共に欧州生糸を以て製したるものよりも成績は佳良であるから、当業者中大に注意を惹いた云ふ者さへあるやうになつた、又某工場の如きは黒染用として伊太利糸を用いないことはなけれども、多くは経緯共に日本糸を用ひて精巧なる黒縞子、薄琥珀類を製造しつゝあるから、黒染用として或程度迄は我が生糸を以て欧州黄色生糸の代用となすことは勿論出来得るもので、現に各工場之を實行して居る（彼の「スキナー」氏の工場では日本糸伊太利糸共に黒染となして経糸に用ひ美麗なる縞子地を織立ててをのを見た）併しなから今日も尚ほ一方には黒染用としては専ら欧州生糸のみを用ふるものが多い、之等の人々は日本生糸は敢て黒染用に適せない訳けであるまいけれども、只た其染上げたる後の光沢何となく脂気少なく引立たぬやうな感があるといふことである。」⁶⁰

⁵⁸ Syndicat de Marchands de Soie de Lyon, *Statistique de la Production de la Soie Recolte de 1938 1939*

⁵⁹ もっとも、イタリア産生糸の中にも白繭糸がなかったわけではない。ロンバルディーア地方では、特に1月から7月までイラン、トルキスタン、コーカサスから輸入した白繭を使ってアメリカ向けに13中から27中の生糸を、ヨーロッパ向けに9中と1中の生糸を生産していた（『The Raw Silk Industry of Italy An Authoritative and Exhaustive Review Written especially for Silk by C.L.Serico', *Silk*, Volume III Number 8, September, 1910, pp.22-23.）。従って、イタリアでも原料に外国産繭を用いて白繭糸は生産されていたけれども、その量はさほど多くはなかったと思われる。

⁶⁰ 紫藤章「米絹業談（承前）」、「大日本蚕糸会報」第221号、1910年7月20日、40ページ。

ここから次の論点を抽出することができる。

- ①黒く染める絹織物を織るには、経糸と緯糸の両方にヨーロッパ産生糸を用いるよりもヨーロッパ産黄繭糸を経糸とし日本産白繭糸を緯糸として織った方がかえってよいこと。従って、ブリーソンが「我 [アメリカの] 機業家は幾多の経験上日本生糸を称して恰好なる緯糸とす」と述べたことを必ずしも悪い意味に受け取る必要はなく、日本産生糸を積極的な意味で緯糸とすることがあったと考えてよい。
- ②経糸と緯糸の両方に日本産生糸を用いて精巧な黒縺子、薄琥珀類を製織している工場もあり、日本産生糸は黒染用としても使用できること。
- ③特にスキナー氏の工場では日本産生糸とイタリア産生糸を経糸として黒染縺子地を織っていたこと。なお、この日本産生糸とは、郡是製糸が製造した生糸である⁶¹。
- ④「黒染用としては専ら欧州生糸のみを用ふるものが多い」と紫藤が述べていることからすると、黒染絹織物を織る場合には経糸ばかりでなく緯糸にもヨーロッパ産生糸を用いる場合が1909年頃にもまだ多かったことがわかる。

それゆえ、1900年代末になればイタリア産生糸のテリトリーであった黒染縺子地にも日本産生糸が進出しているのであるが、なお黒染絹織物を織る場合には経糸にも緯糸にもヨーロッパ産生糸が使われることが多く、「住み分け」はまだ崩れていなかったことがわかる。

フランスでも日本産生糸がテリトリーを確保していたことは、1907年に今西直次郎が次のように述べたことからわかる。

「機業家は素より春蚕糸の堅韌なるものを嗜好するは今更論ずる迄もないが、機業の経済上作業に差支なく、又如何なる生糸の種類と雖とも、織物の種類により品質の一定する以上は用途は多々あるもので、現に佛国 [フランス] 里昂 [リヨン] の織物中絶へず流行品として、織立つる軽目白地及薄色物は、生糸の純白にして光沢の美なるものを使用するが為め我秋蚕糸の如きは屢々歓迎せらるゝことがある、其価格は普通100斤に対し春蚕糸に比すれば15円乃至20円安き方であるが、最上の秋繭を以て丁寧に繰糸したるもので恰も注文に適當する場合には殆んど等差のなきことが屢々ある」⁶²

即ち、フランスでも軽目白地ないし色の薄い絹織物を織る場合には、純白で光沢の美しい生糸を原料に使用するので、日本の秋蚕糸が好んで使用されていたのである。この場合には染色の関係上、経糸にも緯糸にも日本の白繭糸が使用されていたと見てよいであろう。特に秋蚕糸がフランスで歓迎されたのは、今西の指摘にあるように価格が安かったからであろう。しかも春蚕糸ほど「堅韌」ではない、つまり春蚕糸に比べれば抱合の劣る秋蚕糸でも使用に耐えたというのであるから、今西の指摘は抱合がやや劣っていても経糸として使う場合があったことを証するものと考えてよいであろう。

結局、アメリカでもフランスでも日本産生糸には独自の用途があり、イタリア産生糸で代替できない場合もあったから、イタリア産生糸が日本産生糸から経糸需要を奪い尽くすことなどありえなかった。

⁶¹ 紫藤章『米絹絹業談』、74ページに「スキナー」氏ノ工場ニテ京都郡是製糸場ノ生糸ヲ [ポビンに掛けて1分間に] 130回ノ速力ニテ巨輪シ少シノ切断ナク巻取ラレツ、アルヲ見タリ」とあり、郡是製糸が生産した生糸の品質が極めて高いものであったことがわかる。

⁶² 生糸検査所技師 今西直次郎「夏秋蚕糸の需要及其繰糸に関する注意」、『大日本蚕糸会報』第183号、1907年8月20日、1-2ページ。本多岩次郎編纂『日本蚕糸業史』第2巻、157-158ページ。

上海産生糸についても、同じ理が当てはまる。「日本産生糸と同格の上海産生糸は、日本産生糸と同じ位良いか」との質問に対して、「ほとんど全く生糸の利用目的次第である。上海産器械糸1等（上海産器械糸には3つのカテゴリーがあった）は、日本産エキストラ格生糸にほぼ匹敵すると考えられている。大いに増量する織物を織るには、日本産生糸が選ばれる。というのも、日本産生糸は、増量剤をよく吸収するから。上海産生糸は、斯界で知られている生糸の中で最も増量剤を吸収しない」との回答が *The American Silk Journal* に掲載されている⁶³。増量剤を使用する場合には、上海産生糸が日本産生糸に取って代わることはできなかった。

結局、「アメリカの経糸需要は、イタリア産生糸や上海産器械糸によって奪われた」という命題は、偽である。

C 命題3 「アメリカ絹工業の進歩に日本の蚕糸業はついていくことができなかった。」

(1) 先行研究の整理

『日本蚕糸業史』第2巻に掲載された「現今 [1896 年頃] 我国 [アメリカ] にて製造する絹物は之を5年前のものに比するに其品質は全く殊異にして其製造方法に至りても亦固より同しからず今其機業上の変化を以て日本製糸の改良に較ぶれば前者の遙に後者より大なるを見る可し」というブリーズンの見解を石井氏はほとんどそのままなぞり、「1880年代以降、アメリカ絹織物業が急速に発展しつつ製品の高度化を推進めてゆくと、原料生糸としてますます良質な生糸が要求されるようになるが、日本製糸業は、これに十分応ずることができなかった⁶⁴と記している。杉山氏も「日本の技術進歩は、ずっとペースの速いアメリカの技術進歩についていくことができなかった⁶⁵と記している。中林氏も「1890年代半ばになると、[アメリカにおける]さらなる量産化に適した原料糸の供給が迫られるようになる」として、「従来ならばアメリカ市場において需要された諏訪郡産糸の繊度の均一性が、もはやその要求水準を充たさなくなりつつあった」とか「日本器械糸の均一性は [アメリカの] 力織機の高速化に因應されなくなっていた」とかいった理解に立っている⁶⁶。

日本産生糸がアメリカで経糸として使用されない時期があったと考える論者は、アメリカ絹工業が進歩したのに対して日本の蚕糸業は立ち後れたとの理解に立っている。日本の蚕糸業が相対的に立ち後れたからこそ、日本産生糸の品質も相対的に低下し、経糸に要求される品質水準を満たせなくなったと解釈しているのであろう。

(2) 先行研究の検討

アメリカ絹工業が進歩したのに対して日本の蚕糸業は立ち後れたなどという事態は生じていないと筆者は考えている。この問題に接近するために、まずブリーズンの言に検討を加えてみよう。既に見たように、ブリーズンは、日本産生糸の中には「5年以前に於て我 [アメリカの] 需要を充たしたるが如く今日に於て之れを充たす能はざるものある」と述べている。しかし、ここで彼はなぜ「5年以前に

⁶³ “Questions about Raw”, *The American Silk Journal*, Vol.25 No.12, December, 1905, p.48.

⁶⁴ 石井寛治『日本蚕糸業史分析』、44ページ。

⁶⁵ Shinya Sugiyama, *Japan's Industrialization in the World Economy 1859-1899*, p.110.

⁶⁶ 中林真幸『近代資本主義の組織』、189-190ページ。

於て我〔アメリカの〕需要を充たしたるが如く」とわざわざ断ったのであろうか。この5年とは、何を意味しているのであろうか。おそらくブリースンは、先にリチャードソンが日本の鬼頭悌二郎副領事に宛てて送った書簡（1891年11月16日付け）の存在を知っており、これと整合性を保つ必要があると考えたのであろう。

即ち、リチャードソンは、鬼頭悌二郎宛て書簡の中で、「同仲会社ハ其代理人新井領一郎ヲ当紐育ニ置キ其細粗混同等ノ弊ヲ矯正シ品質ノ改良ヲ図ルノ事ニカメ与テ大ニカアリ」とか「茲ニ数年当米国絹業ノ優等日本糸ヲ必要トスルニ急切ナルト日本製糸家モ又茲ニ看ル所アリテ其生糸ノ改良進歩ニ鋭意盡力シタルトニ依リ其結果トシテ日本生糸ノ改良ヲ来シタルハ大ニ〔アメリカの〕絹業社会ノ賞讃シテ措カサル所トナリ随テ今ヤ生糸貿易ノ増進ヲ以テ其改良ノ功ニ酬フルコト、ハナリタリ」と述べている⁶⁷。つまり、新井領一郎が尽力した結果、日本産生糸の品質が向上したことをリチャードソンは認め、1880年代後半から1890年代初めにかけてアメリカ絹工業が品質の良い日本産生糸を大いに必要としていることやアメリカの絹業界は日本産生糸の改良を賞讃してやまないことを指摘しているのである。しかも、リチャードソンは、「今ヤ已ニ当国絹業市場ニ於テ日本生糸ハ全消費高ノ五割ニ居リ而シテ日本生糸ノ用ハ重モニ当米国最上品ノ原料ニ供スルモノトス」⁶⁸とも述べ、1891年の時点でアメリカでは最高級の絹織物を織るために日本産生糸を使用していたことを明らかにしている。つまり、1891年の段階で日本産生糸の品質は極めて高かったとリチャードソンは鬼頭副領事に書き送っているのである。

ところで、ブリースンは1896年2月付けで自己の見解を提示しているから、リチャードソンの書簡とブリースンが作成した案文の間には、約5年の開きがあることになる。この5年の間に急に日本産生糸の相対的品質が低下したというために、ブリースンはアメリカ絹工業の進歩に日本の蚕糸業がついていくことができなかつたのだという理屈を持ち出したのであろう。ここでブリースンの主張が正しいのであれば、1891年から1896年までの5年間に「製造方法」の点で画期的な技術進歩が生じたために、アメリカ絹工業は「今日〔1896年頃〕製造する佳良なる絹物」を織るようになっていたはずである。それでは、実際は、どうであったのか。

米国絹業協会書記フランクリン・アレンは、1900年のセンサスの結果を踏まえて、アメリカ絹工業の発達について論じている。それによると、撚糸業の部門では1880年代までに大きな変化が生じたものの、1890年代には画期的な進歩はなかつた。「撚糸の機械装置においては、過去10年間〔1890年代〕には、これに先立つ2、30年間を画したような大きな変化はなかつた」とフランクリン・アレンは書いている⁶⁹。従って、アメリカの撚糸業で生じた技術革新のために日本産生糸が使い物にならなくなつたという事態は生じていないと解される。

これに対して、織布業の部門では、確かに大きな変化があつた。フランクリン・アレンは、「力織機が導入されて以来、その構造には常に改善が加えられてきたが、おそらくこの10年間〔1890年代〕に遂げた進歩が最も急速で大きな進歩であつた」と述べている。力織機が長足の進歩を遂げたことは、ア

⁶⁷ 農商務省農務局『明治二十八年調 輸出重要品要覧 農産之部 蚕糸』、40ページ、42ページ。

⁶⁸ 農商務省農務局『明治二十八年調 輸出重要品要覧 農産之部 蚕糸』、41ページ。

⁶⁹ Franklin Allen, *The Silk Industry of America* || June, 1st, 1900 || *As shown by the Twelfth Census of the United States, 1902*, p.26.

アメリカ絹工業の際立った特徴をなしている。とりわけ 1890 年代に力織機が大いに発達したために、アメリカでは 1900 年に手織機はほとんど消滅したといわれる。この年にアメリカには 44,257 台の力織機があったのに対して、手織機は 173 台とほとんど取るに足りない数にまで減少した⁷⁰。これだけを見れば、アメリカ絹工業が進歩したのにひきかえ日本の製糸業では技術進歩が停滞していたから、日本産生糸はアメリカで経糸としては使い物にならなくなったというブリーソンの指摘は正しいように見える。

しかし、力織機に生じた進歩を仔細に見ると、ブリーソンの主張には嘘が混じっていることがわかる。例えば、搦み織の分野で生じた変化をフランクリン・アレンは次のように描写している。

「搦み織の効果を出すために行われた進歩について述べよう。搦み織を生産するための現在の生産方法と付属部品は、古い生産方法よりもはるかに進歩している。その結果、ドゥープ [搦み織を織るために織機に取り付ける搦み綜統の部品] は大いに省略され、経糸の切断が減った (原文では *less breakage of warp thread*)。一方の布巻 (beam) を縲子経 (whip thread) のために用い、他方の布巻を地経 (standard thread) のために用いるので布巻きが二つある旧式の方法は、今では全ての糸を一つの布巻から取る方式にほぼ取って替わられた。もともと、模様の関係で縲子経の方が地経より長いデザインでは、そうではない。そうした糸についてだけは、糸を緩める器具 (slackeners) が用いられ、男巻 (warp beam) 全体を動かすことはない。」⁷¹

つまり、1890 年代に力織機の構造に改善が加えられた結果、搦み織を織る場合に経糸が切れる回数が減ったのである。技術が進歩した結果、経糸にかかる負担は、かえって小さくなった。しかも、搦み織は、薄物の一種であるから、日本産白繭糸を原料として織っていたと考えられる。確かに 1890 年代に特に織布部門でアメリカ絹工業が遂げた技術進歩には著しいものがあつたけれども、これに伴って日本産生糸が経糸として使い物にならなくなったというわけではない。ブリーソンは虚実を巧みに取り混ぜ、時には誇張を施し、アメリカの絹工業関係者にとって都合の良い方向に日本の蚕糸業を誘導しようとしていたのである。

なお、ブリーソンの主張には嘘が混じっていることを別の角度から証明することも可能である。ブリーソンは、「5 年以前に於て我 [アメリカの] 需要を充たしたるが如く今日に於て之れを充たす能はざるものあるを如何」と述べて、アメリカで技術が進歩した結果、5 年前の日本産生糸の品質のままではアメリカの需要を満たせなくなったことを示唆している。しかし、技術が進歩すれば劣等の原料でも使いこなせるようになるのが、むしろ通則であろう。ブリーソンがかく主張してから十数年後の 1910 年に、機業の進歩によって上一番格生糸でも経糸として使用することができるようになったとの指摘がなされている。

「機業の進歩と職工の熟練とは普通上一位の生糸でも織物の種類に依りては特種の液体を用ひて巧に経糸に使用することもある、信州上一位の並物が常に苦情多きに拘はらず、割合に良く売れたのも此関係によるのである、されば一方に伊太利糸の代用品となる可き優等糸の輸出を奨励することも勿

⁷⁰ Franklin Allen, *The Silk Industry of America*, p.27. なお、アメリカにおける力織機と手織機の台数の変化については、松井七郎氏の研究がある。

⁷¹ Franklin Allen, *The Silk Industry of America*, p.27.

論必要であるが、並糸の製造も敢て抑圧するにも及ばんのである」⁷²（傍線は引用者による）

なお、アメリカ絹工業の進歩に対して日本の蚕糸業が立遅れたと説く根拠として石井氏は、「時事新報」5426号（1899年1月9日）に掲載された「開明社長の生糸改良談」と題する記事を引用している。同記事において、開明社の社長は、日本産生糸の評判が落ちてきた原因を「米国機業の進歩に比して、製糸業の発達せざるものなるべし。当業者が故意に粗製濫造を為すなど言ふものあらば、実に盲目の太甚しきものと云はざるべからず」と述べている⁷³。つまり、開明社の社長は、『日本蚕糸業史』第2巻に引用されたブリスンの主張と軌を一にする見解を示していた。しかし、開明社社長の談話を引用する時、石井氏は実は矛盾に陥っているのである。石井氏は、「普通糸」生産全盛期の特徴的なあり方」として、「製糸家が、売込問屋と輸出商社の二重の障壁によって機業家から遮断されたまま、ただ、大量の生糸を供給することのみに没頭していた」⁷⁴ことを挙げている。ところで、石井氏によれば、開明社の系譜をひく片倉組は、「普通糸」製糸家に分類される⁷⁵。すると石井氏が説くように「普通糸」製糸家は売込問屋と輸出商社の二重の障壁によって機業家から遮断されたために外国市場に関する情報入手できなかったのだとすると、日本の製糸業がついていくことができないほどの進歩をアメリカの機業家が成し遂げていたということを開明社の社長はなぜ知っていたのであろうか。石井氏の見解の中で「普通糸」製糸家はアメリカの機業家から遮断されていたという方の命題が正しいのであれば、開明社社長の談話は信頼するに足りないことになってしまい、石井氏が提起したもう一つの命題である日本の製糸業が立遅れたという命題を裏付ける史料としては使えないことになる。その反対に、もし開明社の社長の談話が正しいのであれば、彼はアメリカ絹工業に対する見方を石井氏と共有していたことになり、「普通糸」製糸家はアメリカの機業家から遮断されていたとの石井氏の見解は誤りであることになる。これはまさしく矛盾であって、石井説は論理構成の段階で既に破綻しているのである。

しかも開明社の社長の談話には嘘が含まれているから、事実認定の点でも石井説は誤っていることになる。石井氏は、「開明社は別として、とくに中小製糸結社においては、生産急増の過程で「粗製濫造」を生んだこと自体は否定できないと思われる」⁷⁶と述べ、中小の製糸業者が粗製濫造を行っていたことは認めつつも大製糸業者については粗製濫造を否定し、粗製濫造の影響をなるべく小さく評価しようとしている。しかし、その開明社自身が1899年に品質の劣る生糸を生産していたことは、アメリカ側の史料に照らして明らかであり⁷⁷、大製糸業者も含めて業界ぐるみで意図的な品質の切り下げに走っていたのである。従って、「粗製濫造」を否定する開明社社長の談話は嘘であると断じざるをえない。開明社社長の談話は、「現今 [1896年頃] 我国 [アメリカ] にて製造する絹物は之を5年前のものに比する

⁷² 原輸出店支配人 岡田源吉「生糸の供給過多にあらず」、「大日本蚕糸会報」第226号、1910年12月20日、28ページ。もっとも、1890年代にも様々な問題が生じていたにも拘わらず信州上一番格生糸は経糸としても使用されていたとの筆者の立場からすれば、岡田源吉の指摘は1910年には信州上一番格生糸を経糸として使用しても問題が起きなくなったという意味だと解される。

⁷³ 石井寛治『日本蚕糸業史分析』、54ページ。

⁷⁴ 石井寛治『日本蚕糸業史分析』、50ページ。

⁷⁵ 石井寛治『日本蚕糸業史分析』、59ページ。

⁷⁶ 石井寛治『日本蚕糸業史分析』、54ページ。

⁷⁷ 拙稿「生糸品質の不確実性と逆選択による優等格生糸の排除」、「京都学園大学経済学部論集」第16巻第1号、2006年、39-40ページ。

に其品質は全く殊異にして其製造方法に至りても亦固より同しからず今其機業上の変化を以て日本製糸の改良に較ぶれば前者の遙に後者より大なるを見る可し」とのブリーソンの主張と酷似している。その当時、日本政府は粗製濫造を戒めるためにブリーソンの談話を国内に配布していたから、開明社の社長もブリーソンの報告を知っていたのであろう。そこで、開明社の社長は、アメリカ絹工業の進歩に日本の製糸業がついていくことができないと説くブリーソンの報告を見事に逆手にとり、自らが粗製濫造に手を染めていたことを否定してみせたのである。そもそも業者が「自分の所では粗製濫造をやっています」などと言うはずはないが、ブリーソンの虚偽の主張は、開明社の社長に粗製濫造を否定する絶好の口実を与えることになった。

結局、「アメリカ絹工業の進歩に日本の蚕糸業はついていくことができなかった」という命題は、偽である。

D 補論1 品質低下の真の原因

前項では、1890年代のアメリカで日本産生糸の品質が問題にされたのはアメリカ絹工業の進歩に対して日本の蚕糸業が立ち後れたからではないということを示した。しかし、日本産生糸が経糸として使用されなくなったといわれる1890年代から1900年代にかけて、日本産生糸の品質に対する批判は高まっていた。それでは、なぜ日本産生糸の品質が批判されたのか、その理由を整理することが本項の課題である。

結論を先回りして言えば、日本の製糸業者が故意に生糸の品質を落したために、アメリカ側から批判を受けることになったのである。商品の品質を向上させようとすれば生産費が増加するのは当然のことであって、この点で生糸も例外ではない。「生糸の品質を需要者の望むが如き程度迄改善するは幾何かの生産費を増嵩せしむるは必然のことなり」⁷⁸と横浜生糸株式会社の今井林蔵は指摘している。そのために製糸業者にとっては、生糸の品質をどこまで向上させるかは、重要な経営判断の一つとなっていた。

ところが、品質が低い生糸であっても、生糸価格が高騰する局面では捌けていくことがあった。これを知った製糸業者は、生糸価格が高騰する局面では意図的に生糸の品質を切り下げ、生産費を切り詰めようとしたのである⁷⁹。『日本蚕糸業史』第2巻には「本邦の製糸家が生糸の改良を後にして粗悪の生糸を巨額に製造する方利益ありとし精製を怠ることあらんか伊太利生糸は忽ち其機に乗じて日本生糸を蹂躪し取て以て之に代るべし」⁸⁰とリチャードソンが主張したことが記されている。この文言の後段は単なる脅しでしかないが、前段は事実を反映している。即ち、「粗悪の生糸を巨額に製造する方利益あり」とあるのは、日本の製糸業者にとっては生糸の品質を意図的に切り下げた方が利益が大きかったことを示しているのである。こうした事情は1908年になっても変わらなかった。日本で生糸検査の仕事をした経験をもつレオ・デュランは、「[日本の]製糸業者は、なぜ製糸場を改善しないのかと問われれば、生糸をよく仕上げるよりも急いで作った方が引き合うからだ (speed pays them better than the

⁷⁸ 横浜生糸株式会社 今井林蔵「米国向日本生糸の品位に就て (承前)」、『大日本蚕糸会報』第329号、1919年6月、41ページ。

⁷⁹ 拙稿「生糸品質の不確実性と逆選択による優等格生糸の排除」、35-36ページ。

⁸⁰ 本多岩次郎編纂『日本蚕糸業史』第2巻、121ページ。

finish) と答える。アメリカの顧客が満足する限り、彼らは仕事の流儀 (modus operandi) を変えることを好まない⁸¹ と述べている。新井領一郎も 1910 年産生糸の品質があまり良くないことを指摘した上で、「並糸と優等糸との値開きが少い為に良い糸を造くても詰らぬといふ考へから殊更にとりては語弊があるかも知れぬが之が製造上に余り注意を払はぬ結果であるとすれば鼓を鳴らして其不心得を責めねばならぬことです」と警告し、「現に良い糸を造れるのに、夫を殊更に悪い品を造るといふことは全く製糸事業を投機的に経営するからです、之は決して永遠の策ではない」と苦言を呈している⁸²。つまり、日本の製糸業者にとっては品質の良い生糸を作ることは技術的には十分可能であったが、それでは利益が薄いので故意に品質の低い生糸を生産する場合があったのである。チティックも日本産生糸の欠点として、「生糸が希少になって市場価格が上昇すると、契約した生糸よりも劣った生糸が多く届けられる」⁸³ という点を挙げている。

ところが、品質の低下した生糸をアメリカで撚糸工程や製織工程にかけると様々なトラブルが発生したから、アメリカの絹織物製造業者は不満を抱いた。つまり、利潤を極大化できる生糸の品質が日米間で食い違っていたために、日本産生糸の品質に対する批判が 1890 年代のアメリカで高まったのである。先に見たように、リチャードソンは田原休之丞に対して「日本の製糸家は生糸を製造する所の費用を出るだけ減少しやうと云ふ考へがあるために、上等糸を拵へるより寧ろ下等品を拵へるやうになつたのは近頃のことであるが、ソリヤ非常に誤つて居るさう云ふ馬鹿な話はない」と言ったと伝えられる。アメリカの絹織物製造業者にとっては、たとえ生糸の価格が高騰する局面であっても、日本の製糸業者が費用をかけて生糸の品質を元のまま高い水準に保ち続けることの方が望ましい。リチャードソンが「上等の糸を作れば亜米利加の機屋は喜んで使ふ」といったことも、こうした観点に立って読むとよく理解することができる。しかし、このことは、アメリカの絹織物製造業者にとっての話であって、日本側には当てはまらない。日本の製糸業者にとっては、好況の局面では粗製濫造した方が得られる利益が大きくなったから、いくら政府関係者が警告しても、製糸業者は故意に品質を落とすことをやめなかった。それだけに粗製濫造の根は深く、アメリカ側には不満がたまった。その不満が「経糸需要を失うことになるぞ」という極端な表現をとって噴出したのである。

リチャードソンは、日本の製糸業者の行動を改めさせようとしたから、繰返し警告を發した。彼は、日本の鬼頭副領事に対して「余カ伝聞スル所ニ依レハ今ヤ日本製糸家ハ上等ノ糸ヲ製センヨリハ粗悪ノ糸ヲ巨額ニ作ル方収支上割方ナリト云フ趣ナリ」⁸⁴ と指摘している。さらに、鬼頭副領事に宛てた 1891 年 11 月 16 日付け書簡では、次のように書いている。

「近来或ル日本生糸家ニ在リテハ其一時ノ小成ニ愆ラレ今ニ於テハ従来ノ如ク一層改良ヲ図ルノ策ニ出テサルノミナラス却テ之ヲ等閑ニ附シ去リ其生糸ヲ擯斥スルノ氣勢ヲ示シ来レリ是レ他ナシ其生糸ヲ廉価ニ仕上ケンカ為メ劣等品ヲ製造セント欲スルニ職由セスンハアラス是レ客歳 [1890 年]

⁸¹ Leo Duran, Silk Inspector for Cornes & Co., Japan, "Why Are Japanese Filatures Inferior to European?", *Silk*, Volume 1 Number 9, July, 1908, p.17.

⁸² 新井領一郎「本邦製糸業者の一考を煩はす」、「大日本蚕糸会報」第 222 号、1910 年 8 月 20 日、20 ページ。

⁸³ James Chittick, *Silk Manufacturing and Its Problems*, 1913, p.20.

⁸⁴ 農商務省農務局『明治二十八年調 輸出重要品要覧 農産部 蚕糸』、46 ページ。

当国〔アメリカ〕生糸市場ニ於テ實際目撃セル所ニシテ本年〔1891年〕モ亦然リ現ニ或ル日本生糸ノ如キハ折角高評ヲ博シタリシモ今ヤ其声価地ヲ払フテ去リ信ヲ措クモノナキニ至レリ豈ニ遺憾ナラスヤ」⁸⁵（傍線は引用者による）

つまり、リチャードソンにはちゃんとわかっていたのである。日本の製糸業者が生糸を廉価に製造しようとして劣等品を製造しようと欲したことこそが日本産生糸の品質が低下した真の原因だということが。しかも、日本の製糸業者の中に「其生糸ヲ廉価ニ仕上ケンカ為メ劣等品ヲ製造セント欲」した者がいたこととアメリカで一時期高評を博した日本産生糸の中には信用を失ったものがあることを彼が結び付けて理解していることに注意する必要がある。この指摘は、アメリカ絹工業の進歩に日本の製糸業が立ち後れたから日本産生糸の品質がアメリカで批判されるようになったのだという通説的見解を打ち砕くものだからである。

ブリースンも日本産生糸の品質が問題になった真の原因がどこにあるかを認識していた。ブリースンは、「日本糸ノ重ナル欠点」として12の項目を挙げている⁸⁶。その中で特に経糸としての特性と関係があるのは、「第3、伊太利糸ニ比シ製造時間中織機ノ速力ニ能ク堪フルカニ乏シキ事」、「第4、伊太利糸ニ比シテ同等ノ伸力及ヒ強力ニ乏シキ事」、「第12 纖維ノ分裂スル事」という項目である。このうち第3の項目では、次のように述べている。

「有力ナル機業家ノ言ニ拠レバ撚合セヨリ染上、織立ノ間ニ於ケル時間中糸ノ摺レ合ハ固ヨリ甚ダ多キモノナルカ日本糸ハ此点ニ関シ特ニ非常ノ弱点アルヲ示スコト少カラズ日本糸カ特ニ此ノ力ノ少キハ伊太利糸ニ比シテ然リ〔掛〕ノ不完全ニシテ各纖維並行スルガ故ニ操作ニ際シ分裂シ易キ第一ノ理由ニシテ第二ハ日本繭ハ非常ニ種類ノ混合セル故ニ自然スクノ如キ結果ヲ来スナリ又曰ク日本製糸家ハ皆能ク此等ノ欠点ヲ避クル所以ノ道ヲ知レリ而シテ敢テ改善ヲ計ラサルモノハ徒ラニ労力ヲ省キテ目前ノ利益ヲノミ得ントスルニアリ」⁸⁷（傍線は引用者による）

つまり、撚糸工程・染色工程・織布工程で掛かる摩擦に耐える力が日本産生糸ではイタリア産生糸よりも小さいのは、撚掛が不完全であることと蚕の品種が多すぎるためだということをブリースンは正確に把握していた。ところが、彼が続けて「日本製糸家ハ皆能ク此等ノ欠点ヲ避クル所以ノ道ヲ知レリ」と述べていることは、極めて重要である。日本の製糸業者には日本産生糸のこうした欠点を回避する方法が実はよくわかっていたのだということをブリースンは看破しているのである。このブリースンの言に照らせば、日本の製糸業者は売込問屋と輸出商社の二重の障壁に遮られて情報を入手できなかったから緯糸にしかならないような品質の低い生糸しか作れなかったのだと説く石井説が誤りであることは明白である。しかも、生糸品質を向上させる方法を日本の製糸業者は知っていたのに実行しなかった理由もブリースンは見抜いていた。「而シテ敢テ改善ヲ計ラサルモノハ徒ラニ労力ヲ省キテ目前ノ利益ヲノミ得ントスルニアリ」とあるように、日本の製糸業者にとっては労力を省いて故意に品質の低い生糸を作った方が利益が大きくなることをブリースンは知っていたのである。それだけに粗製濫造の根は深

85 農商務省農務局『明治二十八年調 輸出重要品要覧 農産部 〔蚕糸〕、41ページ。

86 「米国市場ニ於ケル日本糸ニ関スル意見」、農商務省農務局『第二次輸出重要品要覧 農産部 〔蚕糸〕、115—119ページ。

87 「米国市場ニ於ケル日本糸ニ関スル意見」、農商務省農務局『第二次輸出重要品要覧 農産部 〔蚕糸〕、115—116ページ。

かった。ブリーズンも問題の根深さを知っていたからこそ、日本産生糸は品質が低いからアメリカでは経糸として使用されないのだという嘘をついて日本側を脅し行動を改めさせようとしたのである。

なお、上記の「第4、伊太利糸ニ比シテ同等ノ伸力及ヒ強力ニ乏シキ事」という項目では、日本産生糸が強伸力に劣るのは細斑があるからだとして正しく指摘している。「細ムラトハ繰糸ノ際全線ヲ構成スル繭〔生糸を構成している繭糸全体〕ノ一箇或ハ二箇ヲ全ク脱落シタルヨリ生ズル一部分ノ名称」であるが、細斑になっている部分は繭糸が欠落しているから切れやすく、強伸力が低下するのである。第12の項目には、「繊維ノ分裂トハ一繰ノ生糸ヲ構成スル護膜質〔セリシン〕ノ不充分スル為メ繭線〔繭糸〕密着セサル一部ヲ言フナリ繰返シニ際シ繊維ノ分裂ハ直ニ自ラ切断セスシテ却テ延長シ殆ント絶テ強力ノナキカ如シ」とあり、日本産生糸の繊維が分裂することがあるのはセリシンの量が足りないためだということも正しく認識していた。

さて、日本の製糸業者による意図的な品質の切り下げが大々的に行われた年として1892年の事例を取り上げよう。1892年は信州産生糸に毛羽が立つという批判が寄せられた年だという点でも⁸⁸、注目すべき年である。この年の生糸相場は、「糸況は順次好調を辿り春挽糸630円より9月の最高910円に昂騰」という状況にあり、「糸は10月より漸落12月820円に下つたが業者何れも〔明治〕23年〔1890年〕の失を償ひ得た」⁸⁹と伝えられる。

このように1892年に生糸価格が上昇したのは、イタリアとフランスでこの年の繭が不作であったからである。そのため世界的規模で生糸価格が騰貴すると同時に日本の生糸輸出が伸びた。在サンフランシスコ領事であった珍田は、1893年1月24日付けで、日本の生糸輸出額が1892年に著しく増加した事実に関するアメリカの実業家の意見として「伊国〔イタリア〕及佛国〔フランス〕の南部に於ける取繭減少せしより〔アメリカの〕商業者は東洋地方に於て其不足額の補充を求めざるを得ず為に本邦産の生糸は輸出の数量と価額を併せて増加進長せしめたり」⁹⁰と報告している。しかも、珍田領事は、次のような注目すべき意見を述べている。

「斯く昨年〔1892年〕に於て本邦生糸輸出の増加は主として伊佛〔イタリアとフランス〕取繭の減少に基きたるものとせば其将来に於ける状況推知し得べしとす之を詳言すれば伊、佛取繭の減少が全世界の市場に影響しつゝある間は本邦生糸の輸出は例年に比し著しき増加価加〔増価増額の誤記か〕を来すべく又本年〔1893年〕両国の取繭にして例年の如く或は例年に比し豊裕なるときは本邦生糸の輸出は例年と基準を同くし若くは減価減額を見るに至るべし故に本邦商業者若くは製糸業者にして這般の盛況本年〔1893年〕より明年明年より其後年と逐年継続すべしとの謬見を抱き此謬見を以て生糸製造の準備を為す如きことあらば一敗言ふべからざるの困難を来すあらん且つ又た謬見に伴ふ一種の弊害として畏るべきものあり即ち昨年〔1892年〕の盛況に依り意外の利潤を得たる者ありしより本年〔1893年〕は更に多量の生糸を供給し巨大の利益を博せんとて粗製濫造に流るゝこと是なり果して斯る不幸なる現象あらんには生糸業者は第一に過多なる製造を為

⁸⁸ 上山和雄「第一次大戦前における日本生糸の対米進出」、『城西経済学会誌』第19巻第1号、1983年、67ページ。

⁸⁹ 平野村役場『平野村誌』下巻、294ページ。

⁹⁰ 「本邦生糸輸出増加の景況」、『大日本蚕糸会報』第10号、1893年3月、31ページ。

すよりして生ずる損失を受け第二に粗製濫造より生ずる影響を感ずることあるべし第一の損失は一時に止まるべきも第二の影響は容易に洗刷し回復することを得ざるなり」⁹¹

上記引用文において珍田領事が示した見通しの正確さには驚かされる。イタリアとフランスの取繭不足に惑わされてずっと好景気が続くものと過信して粗製濫造を行っていることが容易に洗い流すことのできない影響を蒙ることになるぞと警鐘を鳴らしているのである。ところが、1899年には一段と激しい粗製濫造が行われたために信州産生糸の信用はアメリカで失墜し、1900年代から1920年代に至るまで産地を偽装しなければ販売できない羽目に陥った。珍田領事は、あたかもこのことを知っていたかのように思われ、その慧眼には敬服する外ない。

もともと、1892年には繭の品質悪化という特殊要因が生糸の品質悪化に拍車をかけた面もあった⁹²。1892年に長雨で道がぬかるんで和田峠と碓氷峠を越えて繭を運ぶことが困難になったために、信州諏訪地方に立地する製糸場で使用する繭の品質が悪化していたのである。『平野村誌』下巻には「この年[1892年]霖雨うちつゞき和田峠、碓氷峠、泥濘海の如く運搬困難をきはめ繭の損傷実に甚しかった」との指摘がある⁹³。碓氷峠を越える鉄道が開通したのは翌1893年のことであったから⁹⁴、1892年の段階では碓氷峠を越えて繭を運ぶにはまだ人馬に頼らざるを得ず、悪天候のために輸送途中の繭の品質が劣化してしまったのである。輸出用の生糸には比較的高い品質が求められるから、劣化した繭は選繭の過程で取り除けなければならない。ところが、1892年にはイタリアとフランスで繭が不作であったから、生糸価格が世界的規模で高騰した。そこで、信州の製糸業者は、できるだけ多くの生糸を生産して高値で売り抜けようとして、輸出用生糸の生産に充てるべきではない劣化した繭も原料として使用したのであろう。かくして自然的要因と人為的要因が複合して、1892年に生産された信州産生糸の品質はかなり低下していた。その結果、信州産生糸は毛羽が立つという批判を浴びることになったのである。

なお、生糸価格が上昇する局面では、外商も品質よりも数量の確保を優先して生糸を買い付けたから、日本産生糸の品質低下に対する批判が生じた責任の半分は外商にもある。「輸入糸商ニ於テ需用ノ隆盛ニ際シ多量ノ取引ヲ競争セシコトユエ精粗選択ノ暇ナク遂ニ多額ノ雑駁糸ヲ輸入販売セシコトナレハ米国内市ニ於テ我生糸ノ雑駁品種多カリシハ自然の結果ト云フヘキノミ」⁹⁵との指摘が、これを裏付ける。このように生糸価格が上昇する局面では、外商が「多量ノ取引ヲ競争セシコトユエ精粗選択ノ暇ナク」と評される状態に陥ることを日本の製糸業者は知っていたから、意図的に生糸の品質を切り下げたのであろう。あるいは日本の製糸業者が意図的に生糸の品質を切り下げていることを知りつつ外商は買

91 「本邦生糸輸出増加の景況」、「大日本蚕糸会報」第10号、32—33ページ。

92 「抑モ前季節[1892年]我生糸ノ品質精良ナラサルモノ多カリシハ蓋シ製糸家ニ於テ糸価ノ好況ニ乗シ製法ノ如何ヲ看顧セザリシニ基因スレトモ昨年[1892年]ノ成繭ノ較々不良ニシテ上等ノ製糸ニ適当セザリシモノ多カリシハ実ニ原因ナリ」(農商務省農務局『米國輸出入本邦生糸雜駁ノ事実調査 在米國紐育帝國領事報告』、1894年1月23日、111—112ページ。農商務省農務局『明治二十八年調 輸出重要品要覽 農産部 蚕糸』、67ページに採録。「米國へ輸出せる生糸雜駁品調査」、「大日本蚕糸会報」第19号、1894年1月、28ページにもほとんど同じ文章が掲載されている。)

93 平野村役場『平野村誌』下巻、294ページ。

94 「明治21年[1888年]となるや、信越線は碓氷峠を除く外開通し生繭運搬の困難漸く減じたるが故に、関東各地の産繭を利用する者益増加し、(中略)明治26年[1893年]碓氷峠の鉄道完成し交通の障碍、除かるや、同地[諏訪地方]製糸業は著しく其繰糸釜数を増加せり。」(早川直瀬『製糸経済学』、明文堂、1927年、293ページ。)

95 農商務省農務局『明治二十八年調 輸出重要品要覽 農産部 蚕糸』、67—68ページ。「米國へ輸出せる生糸雜駁品調査」、「大日本蚕糸会報」第19号、1894年1月、28ページにもほとんど同じ文章が掲載されている。

い付け数量を確保することを優先したのである。その意味で日本の製糸業者と外商は、「共同正犯」の関係にあった。従って、外商も責められるべき立場にあったが、アメリカの絹織物製造業者の怒りは日本の製糸業者に向けられたのである。

これに関連してロンドン駐在総領事代理大越成徳は、1893年5月27日付けで次のように報告している。

「此頃伊太利〔イタリア〕人某本邦より来著し面会の際横浜生糸取引の状況を聞きたるに本人は該港〔横浜〕に於て生糸検査役を本業とし各商館の依頼を受け輸出品〔生糸〕の鑑定を為せしに本年〔1893年〕の如く該品輸出の盛況を呈したるに当りては欧州向品は最も注意して揃ひたる品を輸送せしと雖も米国向は商館中多少競争して多量を送らんことにのみ汲々せるを以て其検査の如きも頗る不十分なりしに依り不揃品を輸出せしは怪しむに足らず云々若し本人の説をして正確なりとせば是れ全く当館〔日本総領事館〕に於て指示したる原因にして米国向蚕糸輸出に従事する外国商館の不注意より生ずる弊害と認めざるを得ず然るに紐育〔ニューヨーク〕の当業者殊に蚕糸協会の書記長某〔リチャードソン〕の如きは常に我〔日本の〕当業者に向ひて改良の忠告を為し不揃品の多きは我〔日本の〕製糸家の責にあるが如く論ずると雖も在本邦米国商社の不注意に原因することに気付かざるは頗る怪しむべし」⁹⁶

ロンドン駐在総領事代理大越成徳は、日本で生糸検査にあっていた「伊太利〔イタリア〕人某」（おそらくヴィヴァンティであろう）から1893年のように生糸価格が騰貴する年には特にアメリカ向け輸出生糸の検査が甘くなることを聞き、リチャードソンが日本の製糸業者ばかりを責めることに不満を漏らしているのである。悪いことを外国人のせいにするのはどの国にもあるが、アメリカは特にこの傾向が強いように見える。

E 補論2 銀価下落と日本の生糸輸出

筆者は、1985年に発表した論文において、1903年、1906年、1909年、1913年、第一次世界大戦中にイタリア養蚕業が不振に陥り繭供給力が低下したことを指摘し、こうした「敵失」に助けられてアメリカ市場における日本産生糸のシェアが高まったことを従来の研究史が見落としていることを指摘した⁹⁷。さらに、1991年に発表した論文では、原料・労働投入比率を修正することによって洋式製糸技術の適正化を実現した信州式製糸法（上一式製糸法）は供給サイドから見て経済的合理性を具備するものであったことや信州式製糸法（上一式製糸法）では迅速に生産を立ち上げ大量生産を軌道に乗せることができたために信州の製糸業がアメリカ市場の急拡大というビジネス・チャンスにうまく乗じて戦前期日本最大の外貨獲得産業の地位についていたことを指摘した⁹⁸。

中林氏は、2003年に公刊された書において、「1880年代半ばにおける輸出の拡大を、在来製糸業をはじめとする在来産業の拡大に帰するか、それとも、近代製糸業の勃興に帰するかは、日本における

⁹⁶ 「本邦の粗製生糸及羽二重の件」、「大日本蚕糸会報」第14号、1893年8月、39ページ。

⁹⁷ 拙稿「アメリカ市場における蚕糸業の国際競争について（1900—1925年）」、5—6ページ。

⁹⁸ 拙稿「わが国に於ける洋式製糸技術の適正化をめぐる諸問題—信州式製糸法の事例を中心に—」、「京都学園大学経済学部論集」第1巻第3号、1991年。

近代的な経済発展の始まりに関する理解を分ける問題ということになる。(中略) 生糸輸出の増加は、供給側の革新によって説明されるという推論が導かれる」⁹⁹と記し、銀価下落が日本の生糸輸出を促進したという通説を否定することによって、日本の生糸輸出が伸びた原因を供給側に求める見解を呈示した。

銀価下落が日本の生糸輸出を促進したという通説を中林氏が否定した理由は、次の二つである¹⁰⁰。

①電信を通じて製糸業者は横浜の売込問屋を監視しており、銀価下落に伴う外国為替相場の変動は横浜市場で直ちに生糸価格に織り込まれ、実物市場の価格裁定は迅速に達成された。

②ニューヨーク市場では、銀価下落時にイタリア産生糸に対する日本産生糸の相対価格がかえって上昇しており、銀貨下落による「国際相対価格の下落効果」は生じていない。

しかし、筆者は、やはり銀価下落が日本の生糸輸出を促進したという通説を支持する。中林氏は上の①の理由で「強い製糸家像」を描いたが、実際は売込問屋の方が大きな裁量権をもっていた。森氏は、「委託品の大部分は製糸家の意思を必ずしも問ひ合せずして問屋の自由意思で仕切る事が出来るのである。(前貸金貸付当時の契約により)」¹⁰¹と述べ、売込問屋が生糸価格の決定権を握っていたことを明らかにしている。従って、価格の裁定は不十分であり、銀価が下落した割合には横浜生糸相場は上昇していなかった(後述)。

上の②についても、生糸価格が暴騰する局面では、様々な銘柄の生糸の間に存在する値幅が縮小するので¹⁰²、中林氏のいう「相対価格は、日本糸と他国産糸との間の相対的な品質によって変化しており、外国為替相場に対しては独立している」¹⁰³との理解は不正確であると思われる。また、中林氏の挙げるニューヨーク市場の生糸価格は末端価格であり¹⁰⁴、それよりも上流の段階で銀価下落に伴う為替差益が貿易商人(主として外商)によって取得されていたと考えられる。この点を例解するために、具体的な数字を設定しよう。

まず、考察の対象とする期間は、1892年から始まる銀価下落局面とする。森泰吉郎氏は、著書の巻末に付した年表で1892年(明治25年)について「銀価下落始まる。〔明治〕30年に至る」¹⁰⁵と記し、銀価下落が1892年から始まることに注意を喚起している。さらに、消極的気分が濃厚であった日本の蚕糸業が「一般的国内的形勢に刺激せられて遂に樂觀気分へ轉換して経営拡張熱が熾となった」ことを指摘した上で「斯くの如き轉換の背後には伊佛〔イタリアとフランス〕糸の減退及び米国需要の増進と云ふ二つの事実が与つて大なる力をなしてゐるのである。その(中略)最も大なる好影響の一つとして明治25年〔1892年〕より〔明治〕30年〔1897年〕にかけて銀相場が4割方低落して伊佛〔イタリアとフランス〕及米国の貨幣にて測定した我国の物価を著しく安くした暁金本位制の実

99 中林真幸『近代資本主義の組織』、102-103ページ。なお、引用文中の「近代製糸業」とは信州の諏訪郡で勃興した器械製糸業を指す。

100 中林真幸『近代資本主義の組織』、102-121ページ。

101 森泰吉郎『蚕糸業資本主義史』、88ページ。

102 細川幸重『生糸の格と製糸法』増訂改版、明文堂。1919年、51ページ。

103 中林真幸『近代資本主義の組織』、109ページ。

104 中林真幸『近代資本主義の組織』、181ページ。

105 森泰吉郎『蚕糸業資本主義史』、234ページ。

施に際し茲に糸価変動の幅を縮小し製糸経営の危険を著しく小ならしめた事がどれ程、我蚕糸業の為になつたかは蝶々を要せない」¹⁰⁶と述べ、銀価下落の影響を高く評価している。

そこで、銀価下落局面が始まる直前の1891年と始まった直後の1892—1893年について、横浜における生糸価格と米ドル建て為替相場の動向を比較することにしよう。アメリカは実質的に金貨国であったから、銀価下落局面では日本の対米為替相場は下落する。第2表で(A)は横浜市場の生糸価格を¹⁰⁷、(B)は現実の為替相場(円貨100円に対する米ドルで表示)を¹⁰⁸、(C)は横浜市場の生糸価格(A)を現実の為替相場(B)によって米ドル建て価格に換算した数値を、(D)は銀価下落がなく為替相場の水準が1891年のままであったと仮定した数値を、(E)は横浜市場の生糸価格(A)を仮定の為替相場によって米ドル建て価格に換算した数値を表わす。

第2表 生糸価格と外国為替相場

	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
1891年	¥550	¥88.50	\$485.75	¥88.50	\$485.75
1892年	¥900	¥74.00	\$666	¥88.50	\$796.50
1893年	¥950	¥61.00	\$579.50	¥88.50	\$840.75

1892年からの銀価下落に伴って金貨国アメリカに対する為替相場(B)は下落しているが、その反面で横浜市場における生糸価格(A)は確かに上昇しており、価格裁定が働いているようにも見える。しかし、横浜市場の生糸価格(A)を米ドル建て価格に換算した数値(C)は、(A)ほどには上昇していない。横浜市場の生糸価格(A)は、1891年から1892年にかけて1.64倍になったが、米ドル建て価格に換算した数値は1.37倍にしか上がっていない。しかも、1891年と1893年を比較すると、横浜市場の生糸価格(A)が1.73倍になったのに対して、米ドル建て価格に換算した数値は1.19倍になっただけである。もし銀価下落がなく為替相場が1891年のままであったならば、1891年から1893年にかけて米ドル建て価格に換算した数値は1.73倍になっていたはずである。結局、銀価下落に伴う生糸価格の裁定は、現実の為替相場の変動を埋め合わせる水準には達していないことがわかる。つまり、銀価下落は、為替相場の変動を通じて日本産生糸の価格上昇を冷やし緩和する効果をもっていた。もし、銀価下落がなかったならば、横浜市場における日本産生糸の価格は1892年から1893年にかけてアメリカ側からはもっと高く感じられたであろう。このことは、「伊[イタリア]、佛[フランス]南部の収繭減少は全世界の表面に影響を及ぼすべきを以て其結果極て洪大なるべき」¹⁰⁹と表現されるほどイタリアとフランスにおける繭の不作の及ぼす影響が大きく、世界的規模で生糸価格上昇が進行する局面では大きな意味をもった。イタリアやフランスは、ラテン通貨同盟に加盟しており実質

¹⁰⁶ 森泰吉郎『蚕糸業資本主義史』、71ページ。

¹⁰⁷ 平野村役場『平野村誌』下巻、294ページに基づいて設定した。

¹⁰⁸ 橋本重兵衛『生糸貿易之変遷』、丸山舎本店、1902年、119ページに記載の「米国為替参着相場」による。

¹⁰⁹ 「本邦生糸輸出増加の景況」、「大日本蚕糸会報」第10号、32—33ページ。

的には金貨国であったから、ミラノ市場やリヨン市場における生糸価格の上昇は、ストレートに米ドル建て価格にはね返ったと思われるからである。文献史料も、この見方が正しいことを裏付ける。今西直次郎は、「頃日欧米蚕糸経済雑誌を閲するに〔銀価下落に伴う日本の〕為替相場下落は日本生糸に非常なる利益を得せしめ而して欧州生糸に対しては到底競争すべからざるの不利となるべしと云へり」¹¹⁰と記して、1894年にヨーロッパでは銀価下落に伴う国際競争力の喪失が問題になっていたことを紹介している。

従って、銀価下落は、やはりイタリア産生糸に対する日本産生糸の価格競争力を強める働きをした。もっとも、ドル建てで見たアメリカの輸入生糸価格は1920年代まで数十年間に亘って安定していたと早川直瀬氏が述べていることから判断すると¹¹¹、かくして生じた利益の多くは貿易商人（主として外商）により壟断されたのであろう。しかし、貿易商人は為替差益を狙って日本産生糸の取扱量を増やしたと考えられるから、銀価下落が日本の生糸輸出を促進したという通説はやはり正しいのである。それゆえ、銀価下落が日本の生糸輸出を促進したという通説を否定することによって供給側の要因から日本の生糸輸出増加を説明しようとした中林氏の説には根拠がないことになる。

先に述べたように、筆者は1985年に発表した小論において、アメリカ市場における日本産生糸のシェア拡大を供給要因によって説明できることを明らかにした。この理は、1892年から始まる銀価下落の局面でも妥当する。イタリアとフランスの蚕糸業は、1892年には繭の不作のために生糸を生産し供給したくてもできない状態に陥っていた。ところが、1892年にはアメリカの需要は回復していた。繭の不作のためにイタリア産生糸やフランス産生糸の供給は不足していたから、アメリカの需要に応じられるだけの量の生糸を供給することができたのは、日本だけであった。それゆえ、供給力を増した日本の蚕糸業は、銀価下落の後押しを受けつつ、アメリカ市場におけるシェアを高めることができたのである。もっとも、日本産生糸の供給増加には品質の低下という代償が伴っており、その後も粗製濫造を繰り返したために日本の蚕糸業は後に高い代価を払うことになるのではあるが。なお、中国も日本と同様に銀貨圏にあったが、中国産生糸の品質はアメリカ絹工業には適していなかったから、中国の蚕糸業は銀価下落の追い風を日本ほど活かすことはできなかった。

F 命題4 「売込問屋と輸出商社は、情報を遮断した。」

日本の製糸業はアメリカ絹工業の進歩についていくことができなかつたと説く石井氏は、その理由を情報の遮断に求めた。製糸業者は、売込問屋と輸出商社の二重の障壁によってアメリカの機業家から遮断されたために情報を入手することができず、生糸の品質を改善することができなかつたのだという¹¹²。

しかし、生糸の品質を改良するために必要な情報は、日本側に届いていた。しかも、当のリチャードソンが、有益な情報を伝えていた。日本の鬼頭副領事がリチャードソンに「尚ホ一歩進メテ本邦生糸ノ中当地〔アメリカ〕ニ苦情アルモノヲ承リタシ」と問うたのに対して、リチャードソンは「殊ニ信州機

110 今西直次郎「我生糸将来の生産力に就て」、「大日本蚕糸会報」第27号、1894年9月、14ページ。

111 早川直瀬『製糸経済学』、明文堂、1927年、575-576ページ。

112 石井寛治『日本蚕糸業史分析』、50ページ。

械〔糸〕ノ毛羽立タルニ付テハ苦情少カラス右ハ畢竟製糸家ニ於テ其糸ニ与フルニ華美ノ光沢ト良善ノ外観ヲ以テセンカ為メ専ラ其品質ヲ此二点ノ犠牲ニ供シタルモノニ似タリ」と答えている¹¹³。つまり、信州産生糸に毛羽が立ったのは製糸業者が生糸の品質を犠牲にして生糸の光沢と外見ばかりを重んじたためだということを知ったのは鬼頭悌二郎に1891年に明言しているのである。1891年といえ、石井説で売込問屋の支配が強まったとされる1890年頃とほとんど同時期である¹¹⁴。しかし、横浜の売込問屋や輸出商社は、決して情報を遮断してはいなかった。なぜならば、アメリカの絹織物製造現場では生糸の光沢など評価されないのだから日本の製糸業者が生糸の光沢を重視して抱合や強伸力を損なうのは誤りであるという情報が、鬼頭副領事によってきちんと伝えられていたからである。

なお、売込問屋は、情報を遮断するどころか極めて有益な情報を製糸業者に伝えていた。信州の製糸業が発展したのは横浜の生糸売込問屋が資金を融資したためだということが、既に明らかになっている¹¹⁵。しかも、売込問屋は、資金の貸し付けを通じて、企業経営者にとって最も重要な情報を伝える役割も果たしたのである。即ち、製糸業者が生産した製品（生糸）に対する需要がどの程度あるのかという情報は、売込問屋から製糸業者へと伝えられた。その情報は、売込問屋が提供した融資の条件に込められて、製糸業者に伝えられた。売込問屋は、製糸業者が所有している釜の数に応じて融資の額を決めていた¹¹⁶。この条件の下では、より多くの融資を獲得しようとして製糸業者が所有釜数を増やそうとするのは、自然な流れである。それでも売込問屋は一貫して製糸業者が所有する釜数に応じて融資し続けたから、製糸業者が所有釜数を増やすことを黙認していたと考えられる。

それでは、なぜ売込問屋は製糸業者が所有釜数を増やそうとするのを黙認していたのであろうか。売込問屋が貸し付けを行った結果、釜数が増えれば、生糸生産量が増えるから、売込問屋が取り扱う生糸の量も必ず増える¹¹⁷。すると、売込問屋が得る口銭の額も増える。従って、売込問屋は、製糸業者が釜数を増やして生産能力を拡張することを歓迎した。しかし、こうした好循環が成立するのは、生糸の生産量（供給量）が増えても順調に売り捌くことができる場合に限られる。供給量を増した生糸を売り捌くことができず滞貨の山を築くような事態に陥れば、製糸業者の経営は行き詰まり、売込問屋は融資した資金を回収できなくなってしまうはずである。こうしたリスクが存在するにも拘わらず、売込問屋は融資し続けた。商品（生糸）の供給量が増えても必ず売り捌くことができるという見通しや自信が、売込問屋にあったからである。「問屋金融が〔明治〕30年台急激に増加したのは（中略）彼等が生糸貿易の前途を楽観し得た故であらう。これによつて製糸家はよく当時の需要の増進と

113 農商務省農務局『明治二十八年調 輸出重要品要覧 農産部 〔蚕糸〕、49ページ。

114 石井寛治『日本蚕糸業史分析』、54ページ。

115 森泰吉郎氏は、「明治20年代既に或る程度に於て製糸家への金融者であつた処の横浜売込問屋の融資振りは30年代に入り極めて寛大となつて製糸家の活躍を刺激してゐる。例へば（中略）長野県製糸発展の背後には問屋の大きな金融援助があつたのである。」と述べた後に、二宮峰男『生糸貿易と金融』、51-53ページを引用している（森泰吉郎『蚕糸業資本主義史』、83ページ。）

116 「問屋は製糸家の信用力は勿論無視し得ぬが、それよりも寧ろ所有釜数の多少によつて融資額を決定する」（森泰吉郎『蚕糸業資本主義史』、88ページ。）

117 「横浜市場の組織を見るに製糸家出荷糸の数量は総て蚕糸貿易商同業組合（問屋団体）の手で正確に研鑽され且つそれが何れの問屋へ委託されるかも明瞭にされてゐるから、問屋は前貸金融通の際約束したる予約委託量を確保されて居る。」（森泰吉郎『蚕糸業資本主義史』、88ページ。）

歩調を合せて生産を拡張し得たのである」¹¹⁸と森泰吉郎氏が指摘しているのは至当である。売込問屋は、日々生糸を売り込む中で、商品（生糸）に対する引き合いが強いことを膚で感じて知っていたのであろう。もちろん、よく知られているように生糸相場は時に激しく乱高下し、市場に滞貨の山ができることも珍しくはなかった。しかし、たとえ一時的に滞貨の山ができて、いずれ景況は好転し、滞貨が一掃されることを売込問屋は知っていたのである。だから、製糸業者が釜数を増やして生産能力を拡張することを売込問屋は黙認し、釜数が増えるに従って融資の金額を増やし続けた。言い換えると、製糸業者が所有する釜数に応じて売込問屋が融資金額を決めていたということは、売込問屋が市場の拡大に自信を持っていたことの表れなのである。かくして売込問屋は、釜数（生産能力）を増やしてもよいという合図を製糸業者に送り続けた。この合図は、長期的に見れば、正しい合図であった。市場が閉塞状態に陥るようなことがあっても一時的なものに過ぎず、右肩上がりでは市場は拡大していたのだから。もっとも、売込問屋が誤って投資リスクを実際よりも低く評価していた可能性はある。商品（生糸）が売れ残っても損害を負担するのは、製糸業者であった。売込問屋は、生糸の販売代金に応じて口銭を受け取るだけであるから、商品（生糸）が売れ残っても損失を負担することはない。従って、製糸業者の増産投資が裏目に出ても、売込問屋が直接損害を被るわけではない。増産投資のリスクを負担するのは製糸業者であって売込問屋ではないから、売込問屋のリスク評価が甘くなった可能性は排除できない¹¹⁹。しかし、結局、そうした事態は稀にしか生じなかったから、投資リスクの評価は概ね妥当な範囲内に収まっていたと考えられる。かくして生産能力をどの程度拡張すべきか、あるいはどの程度の金額の投資を行えばよいのかという極めて重要な経営判断を下す上で有益な情報が、売込問屋から製糸業者に伝えられたのである。アメリカ市場で日本産生糸のシェアが高まる上で大きな役割を果たした信州の製糸業者が増産投資に踏み切ることができたのは、生産能力を拡張すべしという正しい情報を売込問屋が発信したからである。釜数に応じて融資の金額を決めるという売込問屋が定めた融資の条件は、生糸生産量を増やしてもよいという合図となった。市場が拡大基調にあるので増産投資を行ってもよいという情報を売込問屋は製糸業者に送ったのである。売込問屋は、情報を遮るどころか、企業経営上極めて重要な情報を製糸業者に伝えた。

従って、「売込問屋と輸出商社は、情報を遮断した」という命題は、偽である。

G 補論3

日本産生糸は一時期の欧米市場で経糸として使用されなかったと説く見解は、経糸と緯糸の間に越え難い差があったことを暗黙のうちに前提にしている。しかし、通説の思い込みとは逆に、経糸と緯糸の境目は曖昧であった。佐藤永孝は、「優等糸であるからと云つて、必ずしも夫が経糸になると極つて居る訳ではないので、假令ば信州上一番格でも緯糸にするものもあり経糸にするものもあると云ふ有様であります

118 森泰吉郎『蚕糸業資本主義史』、87ページ。なお、売込商は、横浜開港後に生糸を外商に売り込み始めた当初から、楽観的見通しを持っていたと思われる。ヨーロッパで蚕病が流行したために生糸の供給量が不足していたまさにその時に横浜が開港したから、開港当初から日本産生糸に対する引き合いが強かったからである。

119 「問屋の楽観気分は自ら製糸家に於けるそれと意味が違ふ。前者は単に金融者として間接なる危険負担をなすに過ぎぬが後者は、糸価の変動に対して直接損益を生ずる。其処で前者は、製糸家の資力充実よりも生産高の増加を希望しその方針で金融を行ふ。」（森泰吉郎『蚕糸業資本主義史』、87—88ページ。）

から、到底日本生糸の経糸に使用せらるゝ割合を知ることが出来ないのであります」¹²⁰と1906年に述べている。しかも、特にタフタについては、「絹のタフタは練織物で、経[糸]に諸撚[オルガンジン]の練晒か練染絹糸を、緯[糸]に片撚[トラム]の練晒か練染絹糸を使い平織に織る。経[糸]にも片撚[トラム]を使ったり、緯[糸]にも諸撚[オルガンジン]を使うことがある」¹²¹といわれ、緯糸用のトラムを経糸に充てることもあるなど経緯の別は不分明であった。ところが、アメリカでタフタの緯糸としてよく使用されていたのが、信州上一番格生糸なのであった¹²²。従って、先の佐藤永孝の指摘と併せると、アメリカの絹織物製造業者は、便宜によって信州上一番格生糸を経糸にしたり緯糸にしたりしていたと考えてよいであろう。それゆえ、信州上一番格生糸がアメリカで経糸用途から排除されることはなかったのである。信州上一番格生糸は一貫してアメリカで経糸としても使用されていたと筆者が考えているが、その論拠の一つとして経糸と緯糸の区別は通説が想定する程厳格ではなかったということを指摘しておきたい。

H 補論4

日本産生糸が経糸需要を失ったと説く学説は、日本産生糸が経糸部門へと進出していった時期にも言及している。例えば、森氏は、1908年に横浜で「優良品」と「普通品」の価格差が開いたために日本の蚕糸業が「優良品」生産に傾きアメリカの経糸需要に応じるようになったという見解を示している。即ち、

「明治40年^{ツマ}台[代]我蚕糸業の風潮が優良品生産に傾いた事は明治42年[1909年]東京経済雑誌(第60巻74頁)が「昨年[1908年]来横浜市場に於ける糸価の優良品と普通品との開き著しく優等品は相当の利益ありしも普通品の売行悪かりし…(これ需要地たる米国は)近来優等品の不足にして普通品の過剰に苦しむ」とある事が原因である。私は是等の事情を以て日本糸が米国の経糸需要に応じるべき時代が来たと見るのである。猶明治43年[1910年]生産調査会に於ける蚕糸業の発達及改善に関する決議中に曰く「需要方面の大規模化に応ずる為と及び清国は裾物が増加し優良品の増加の傾向なき故今日の経糸輸出20—30%の状態をもつと増加せしむる為に品位改良統一を要す」とあり。」¹²³

石井氏は、「日本生糸が、再び経糸部面へ進入し始める」ようになったのは、「1907年恐慌を契機に、(中略)同国[アメリカ]の絹織物業者は、中等絹織物の生産のために、経糸として従来多く用いていた高価なイタリア糸を捨てて日本糸を求め、緯糸としては逆に日本糸をより安価な清国広東糸へと切り換える方向を採ったからである」と説き¹²⁴、続けて次のように指摘した。

「アメリカ絹織物業の方針転換は、横浜市場においては、1908—09年にかけて経糸用の「優等糸」と緯糸用の「普通糸」との価格差がそれまでになく著しく大きくなった点にあらわれ、従来「普通

120 佐藤永孝「米国生糸市場に於ける新現象」、「大日本蚕糸会報」第173号、1906年10月15日、47ページ。

121 吉川和志『新しい織物の知識』、長江書房、1967年、81ページ。

122 繰返しになるが、極めて重要な点なので、今西の指摘を再度引用しておこう。「一昨年[1908年]上一番物と飛切物との値段が200円も差のあったは、当時「タフエタ」織の流行が衰微して其緯糸に最も多く供せらるゝ上一番の需要が減した実例もある」(今西直次郎「再び欧州に於ける本邦優等生糸の需要に就て」、「大日本蚕糸会報」第220号、1910年6月20日、10ページ。)

123 森泰吉郎『蚕糸業資本主義史』、81ページ。

124 石井寛治『日本蚕糸業史分析』、46ページ。

糸」生産方針を採ってきた多くの製糸家に大きな動揺を与えることになった。彼らの代表たる長野県諏訪郡の片倉組と岡谷製糸会社が、いずれもこの前後から所有製糸場の一部で「優等糸」生産を開始した¹²⁵

さて、ここでは横浜市場で「優良品」（石井氏は「優等糸」と呼ぶが、筆者は「優等格生糸」と呼ぶことにする）と「普通品」（石井氏は「普通糸」と呼ぶが、「信州上一番格生糸」とほぼ同義）の価格差拡大をもたらしたとされるアメリカ市場の動向について考察を加えておこう。つまり、1900年代末に信州上一番格生糸の格付で販売されていた生糸の価格が低迷した理由について検討しよう。

信州上一番格生糸も含む日本産生糸は、欧米市場で一貫して純絹織物の経糸にも緯糸にもなっていた。ところが、1907年恐慌を契機としてアメリカで絹綿交織物や絹紬が流行するようになると、純絹織物に対する需要が減退した。こうした織物では経糸にも緯糸にも日本産生糸が使われることはなかった。

まず、絹綿交織物には、二つないし三つの種類があった。第一に、先に見たように、経糸にベスト・ナンバー・ワン以下の格付のイタリア産黄繭糸を用い緯糸に綿糸を用いて絹綿交織物を織ることがあった。第二に、経糸に綿糸を用い緯糸に広東産生糸を用いて絹綿交織物を織る場合もあった。レオ・デュランは、アメリカにおける広東産生糸の用途を説明して、「ニュー・イングランド地方の綿工場は、管巻き用に (on quill) 品質がダブル・エキストラ (XXB) で繊度は15中 (14/16) と24中 (22/26) の広東産生糸を購入する」¹²⁶と述べている。「管巻き (quill)」とは、緯糸を巻き取る道具であるから、ここでレオ・デュランは広東産生糸が絹綿交織物の緯糸として使用されていたことを示唆しているのである¹²⁷。さらに、綿糸と柞蚕糸を交織する場合もあった (後述)。

しかも、中国から輸入した柞蚕糸を織って作る絹紬が流行したことも日本産生糸にとって打撃となった。アメリカにおける絹紬の流行を描写して、「支那ノ柞蚕糸ハ近來米國ニ於ケル織物界流行ノ變遷ト価格ノ低廉ナルトニ依リテ其輸入ハ大ニ増加セリ而シテ其用途ハ婦人ノ衣服又ハ男子ノ塵除ケ用ノ外套等ニ使用セラレ経緯共ニ柞蚕糸ヲ用ユルモノアリ又綿糸ノ交織ヲナスモノアリ」¹²⁸ (傍線は引用者による。)と紫藤は述べている。

従って、1907年恐慌を契機として絹綿交織物や絹紬が流行したために、信州上一番格生糸をはじめとする日本産生糸は、経糸需要と緯糸需要の両方を一挙に失ったのである。その影響は、信州上一番格生糸の格付で販売されていた生糸に大きな影響を及ぼした。1900年代から1920年代に至るまで、信州上一番格生糸の中で品質の良いものは産地を偽装して関西糸として売られており、信州上一番格生糸の格付のまま販売されていたのは特に品質の低い生糸であったからである。筆者は先に1910年代後半には産地の偽装は収束に向かったのではないかと記したことがあるが¹²⁹、誤りであるので訂正しておく

125 石井寛治『日本蚕糸業史分析』、46ページ。

126 Leo Duran, *Raw Silk A Practical Hand-Book for the Buyer*, p.141.

127 紫藤章も「綿糸又ハ広東糸ヲ緯糸トナセル中等織物ハ其価カ割合ニ廉価ナルヲ以テ広ク需要者ニ行キ渡ルノ便路アリ」(紫藤章『米絹業談』、57ページ。)と述べている。

128 紫藤章『米絹業談』、63ページ。

129 拙稿「生糸品質の不確実性と逆選択による優等格生糸の排除」、47-48ページ。

たい。1919年という遅い時期になってもなお信州産生糸に対する信認は失われたままであり遂に回復することはなかったことを示す史料が新たに見つかったからである。1919年8月に発行された「大日本蚕糸会報」には、信州上一番格生糸であることを示す商標を貼付するとかえって取引の妨げになるので、原商標を貼り替えたり産地を偽ったりしていたことを示す記事が二つ掲載されている。

「信州製糸家が我輸出額の4割に相当する生糸の生産をなし、更に之等の製糸家の手に依つて 他府県に経営して居るものを加ふれば、実に我輸出生糸の6割を占むる大なる実力を有して居る信州製糸家の国家的地位とを顧みて、特に信州製糸家に望む可きものが有る、彼の地 [アメリカ] の実際を見れば、信州製糸家の商標は絶対無価値のものであると云ふも差支ない。信州名義では米国へは生糸が売れぬのが事実である故に信州糸は、原標は悉く剥奪されて、輸出業者の私標か或は他地方産の名義を以て取引せられて居るのである」¹³⁰ (傍線は引用者による)

「蚕糸業の信州か信州の蚕糸業かと言ふ位の大生糸生産国が、全国の4割乃至5割の生糸国だと叫んで居るに抱はらず、米国へ行く信州糸は至て少い、何故かと訪ねて見ると米人は今日 [1919年] 信州生糸然も信州上一番糸と言ふと全く毛嫌ひして振り向きもせない、どういふものか彼等の頭には信州糸即ち劣等糸と深く刻み込まれて居るらしい、同時に悪い糸を見ると信州であらうと判断するが彼等市場間に於ける通用語となつて居る、故に今日 [1919年] では貿易業者も仲買業者も勢ひ信州糸は商票を換へ、名前を換へて取引するより外ない、同じエキストラでも信州名の就いたものは他のエキ [ス] トラより劣等と見做されて居る」¹³¹ (傍線は引用者による)

しかも、1920年になってもまだ産地の偽装が行われていたことを証する史料も見つかった。日本の訪米視察団と米国絹業協会代表者との協議会の場で今井氏やポスト氏が原商標を使用すべしと主張したのに対して、ダウティー氏は「信州糸の優良部分は関西一番とせらるゝが故に信州一番は其良好なる部分を採り除かれたる不良のもの而已残さるゝ事となり従て優等品を希望する者は斯かるものを購入する事なかるべし」¹³² (傍線は引用者による) と述べて原商標の使用に反対したという。1920年になってもなお産地の偽装が行われていたからこそ、ダウティー氏は原商標の使用に反対したのである。

アメリカでは生糸は主として格付に依って売買されており商標に依って売買することは少なかった。1909年にアメリカを視察した紫藤章は、「[アメリカの] 生糸輸入商及生糸商等カー一般ニ機業家ニ生糸ヲ売込ニハ特ニ製糸場名ヲ指名シテ注文ヲ受クルモノ勿論之レアリト雖モ多クハ格付ニ依リテ之ヲ為セルカ如シ」¹³³と指摘している。それだけに生糸の産地が偽装されて実際の格付よりも上の格付の生糸と偽って販売されることは、アメリカの絹織物製造業者にとって大問題であった。紫藤が1915年に発表した日本産生糸の格付がアメリカで大きな反響を呼んだのは¹³⁴、産地の偽装と虚偽の格上げが横行していたからである。また、格付に依って生糸を売買することが多かったからこそ、1920年代になっても格付の信頼性が日米間の懸案となったのである。

130 長野県技師 伊藤義一「▲信州製糸家に望む▼」、「大日本蚕糸会報」第331号、1919年8月、58ページ。

131 「▲信州生糸の評判」、「大日本蚕糸会報」第331号、1919年8月、58ページ。

132 志村生「統一原票の採用を宣伝す」、「大日本蚕糸会報」第337号、1920年2月1日、52ページ。

133 紫藤章「米国絹業談」、農商務省生糸検査所、1910年、99—100ページ。

134 農林省生糸検査所『横浜生糸検査所六十年史』、1959年、235—243ページ。

なお、紫藤が説くようにアメリカでは「製糸場名ヲ指名シテ注文」することがあまりなかったのは、生糸価格の上昇を避けるためである。チティックは、バイヤーが生糸商たちに「窪田館」のような特定の商標の生糸を注文すれば、半ダース以上の注文が電信で横浜に送られ生糸相場が上昇することになるだろうと述べている¹³⁵。特に信州上一番格生糸のように横浜蚕糸外四品取引所で指標銘柄に採用されるほど大量に出回っており売買しやすかった生糸については、格付に依って取引をすることが多かったと思われる。これに対して、比較的品质の高い生糸は、市場を経由しないで売買されることが多かった。チティックが言うように市場を通じて特定の銘柄に大量の注文を出せば価格が上昇するので、アメリカの機業家は品質の高い生糸の生産者に対しては、直接取引するようにしていたのである。例えば、スキナーは、三龍社が品質の高い生糸を生産していることに気付くと直接取引を申し込んでいる¹³⁶。このスキナーが郡是製糸と直接取引していたことは有名である。欧米崇拜の抜けない日本人は、外国企業から直接取引を申し込まれると名誉に感じ直ちに応諾していたようである。かくして欧米の需要家は、本当に品質の良い生糸を見つけると直接取引によってこれを入手していた。従って、品質の良い日本産生糸は市場を介さず市場の外で売買されていたのである。市場で取引されていた生糸は、品質が安定しない「レモン」（欠陥商品）であることが多かったから、アメリカの需要家は警戒して高値で引き取るうとはしなかった。結局、市場では「悪貨が良貨を駆逐する」形で「レモン」の典型である信州上一番格糸が大量に出回るようになっていた。

しかし、先に見たように、信州上一番格生糸も特に1900年代末には経糸としての適性を高めており、信州上一番格生糸の格付のまま販売されていた生糸であっても経糸としての使用に十分耐えることはアメリカ側にも認識されていた。しかし、産地の偽装が行われていたために、本来の信州上一番格生糸の中でも経糸としての適性が特に高いものは、関西糸と偽ってアメリカで販売されていたから、信州上一番格生糸の格付のまま販売されていた生糸については純絹織物の緯糸に充てられる比率の方が高かったと考えられる。ところが、1907年恐慌を契機として生じた需要構造の変化のために、純絹織物に対する需要が減退し、代って絹綿交織物や絹紬に対する需要が増加するようになった。そのため信州上一番格生糸の格付のまま販売されていた生糸は、多くの緯糸需要を失うことになった。

「織物の如きも上等物の売行が大に減じ、加ふるに「リボン」の如きは最も其売行が悪かつた、之に反し純絹物に斯る打撃を受くと同時に他方には、格安物即ち絹綿交織物が非常に歓迎せらるゝに至つた、尚一方には支那柞蚕織物〔絹紬〕が流行して〔経糸も緯糸も〕全部柞蚕〔糸〕にて織るか或は柞蚕〔糸〕を経糸にし横〔糸〕に玉糸を織つたものなぞが流行したのであるからして我国生糸貿易上打撃を受けたものは多く緯糸向のものに多かつたのである、加ふるに広東糸が比較的糸質は粗悪であつても価が廉いので、著しく需要を増した為に、日本の緯糸物たる上一番物又は座繰生糸が打撃を

135 James Chittick, *Silk Manufacturing and Its Problems*, p.14.

136 「御承知の如く全世界に卓絶せる蚕糸は伊佛両国の黄繭糸であるが、我日本国に於ても之れと同様の糸質に於て絹糸光沢に於て一歩も譲らない黄繭糸が吾が愛知県下のみで6千梱から産出するに至つて居る、先年米国大機業家ウキリアムスキナー氏が在岡崎町三龍社を視察せられたる際其繰糸せる原料の大多数が黄繭にして然かも伊佛産の黄繭に一籌も輸せざる原料を使用し優良の蚕糸の製造せらるゝを見て痛く驚嘆せられ之が為め同会社と直接に取引を開始せらるゝに至りしと云ふ」（二宮竜治「黄繭種問題（十）」、「大日本蚕糸会報」第275号、1914年12月1日、56ページ。）

受くる様になつたのである。」¹³⁷ (傍線は引用者による)

さて、この引用文との関連で、アメリカの絹織物業者は「中等絹織物の生産のために、経糸として従来多く用いていた高価なイタリア糸を捨てて日本糸を求め、緯糸としては逆に日本糸をより安価な清国広東糸へと切り換える方向を採った」¹³⁸と石井氏が説明していることを取り上げよう。この石井氏の説明を素直に読むと、「1907年恐慌以前にはアメリカの絹織物業者は経糸にイタリア産生糸を用い緯糸に日本産生糸を用いて純絹絹織物を織っていたが、恐慌後は安価に生産するために経糸に日本産生糸を用い緯糸に広東産生糸を用いて純絹絹織物を織るようになった」と言っているように読める。この説明に石井氏は注(21)を付し、その根拠として「生糸検査所長紫藤章『米国絹業談』(『大日本蚕糸会報』216号、1910・3・20)および同『米国絹業談』35頁」¹³⁹を挙げている。ところが、紫藤章『米国絹業談』、35ページには、かかる記述はない。もう一つの典拠とされた「大日本蚕糸会報」第216号に掲載された記事についてはページ数の指示がないので、石井氏がどの部分に依拠されたのかを確定できない。憶測では、上記引用文で傍線を付した部分ではないかと思われる。もし、そうであれば、上記引用文中の下線部は、絹綿交織物がアメリカで流行するようになったので絹綿交織物を織るために使用される広東糸の需要が増した反面で純絹絹織物は流行しなくなったので純絹絹織物の緯糸として使用されていた「上一番物又は座繰生糸」が打撃を受けたということをいと解される。石井氏は、純絹絹織物と絹綿交織物ないし絹紬を混同したために、史料を読み違えたのではないだろうか。

結局、1900年代末に信州上一番格生糸の価格が低迷したのは、複合的な要因による。第一に、産地の偽装が行われたために、信州上一番格生糸の格付のまま販売されていた日本産生糸の価格は、1907年恐慌勃発前から既に下落に転じていた。第二に、産地の偽装が行われた結果、信州上一番格生糸の格付のまま販売されていた生糸の品質は特に低くなっていったから、その多くは緯糸として使用されたと目される。そこへ1907年恐慌が襲い絹綿交織物や絹紬が流行する反面で純絹絹織物の流行は下火になったので、信州上一番格生糸の格付のまま販売されていた日本産生糸は緯糸需要を失った。しかし、アメリカにおける絹綿交織物の流行が1910年頃に収束し純絹絹織物が再び流行するようになると¹⁴⁰、信州上一番格生糸の格付のまま販売されていた日本産生糸に対する需要は増加することになった¹⁴¹。

3. 結び

リチャードソンは、日本の鬼頭副領事に対して「本邦の製糸家が生糸の改良を後にして粗悪の生糸を巨額に製造する方利益ありとし精製を怠ることあらんか伊太利生糸は忽ち其機に乗じて日本生糸を蹂躪し取て以て之に代るべし事爰に至るときは日本生糸は僅に横糸若くは縫糸用の為に売却せらるゝ

137 紫藤章『米国絹業談』、『大日本蚕糸会報』第216号、1910年3月10日、3ページ。

138 石井寛治『日本蚕糸業史分析』、46ページ。

139 石井寛治『日本蚕糸業史分析』、55ページ。

140 新井領一郎「本邦蚕糸業家の一考を煩はす」、『大日本蚕糸会報』第222号、1910年8月20日、20ページ。

141 「昨年〔1908年〕ノ如ク絹綿交織物ノ流行盛ナル際ニハ其〔日本産生糸の〕緯糸ニ使用セラルヘ最大ニ減少シ又タ純絹織物流行スルニ至ラハ必スヤ其〔日本産生糸の〕量ヲ増加スルニ至ルヘキナリ」(紫藤章『米国絹業談』、64ページ。)

に止まり随つて年々販路の減縮を来すべきや必せり」と言つたと伝えられる。ところが、それよりも20年も前に、このリチャードソンの言葉にそっくりの文言が外商から発せられているのである。即ち、1871年4月18日付で外商が民部省と外務省に宛てて提出した「製糸方法書」の中に、次のような記述がある。

「今般横浜の糸商人等公に會議して日本の糸を製する工人及び其商人等に敢て従來の惡習を改革する事に眞実に注目せしめん事を決定し因て論して曰く若し上に記述せし條々を守らざるに於ては欧州の市場必ず日本商人の爲に閉ちて開かざるへしされは日本の生糸諸外国に輸出するの數漸々減すへく日本人と外国人の利益と富の根源ともいふべき生糸の交易終に衰廢すへしと（中略）今回は是最後の諫言なれば懇に之を体認し未だ全く地に墜ちざる日本生糸の聲価をして再び従前の高処に挽回せは即ち余輩に対して親切の報酬と思はんのみ」¹⁴²（傍線は引用者による）

細糸ではなく太糸を作るようにせよ等の勧告を日本に対して行つた「製糸方法書」に「若し上に記述せし條々を守らざるに於ては欧州の市場必ず日本商人の爲に閉ちて開かざるへしされは日本の生糸諸外国に輸出するの數漸々減すへく」との文言があるのを知つて驚くのは、筆者一人ではないであろう。その表現が、リチャードソンの言葉と酷似しているからである。言うことをきかぬと日本は外国市場を失うことになるぞと脅している点で、両者の主張は軌を一にしている。それどころか「製糸方法書」に見える「欧州の市場必ず日本商人の爲に閉ちて開かざるへし」という文言は、1980年代に生じた日米貿易摩擦の中で、「欧州の市場」が「アメリカ市場」に置き換えられて繰り返されることになった。日本が不公正な貿易を行っているとアメリカでは保護主義が台頭することになるという警告が日本政府に対して発せられたからである。「製糸方法書」の末尾にある「今回は是最後の諫言」との文言は、笑止千万である。その後も「諫言」は、何度となく繰り返された。1871年以來、日本人は同じ手で何度も騙されているのである。日本産生糸は外国市場で経糸にならなかつたと説く通説は、リチャードソンやブリースンが発した「諫言」に含まれている虚偽の部分を実と誤認したものであつて、虚構の上に築かれているのである。

142 『明治年間法令全書』第4巻、原書房、1974年、479ページ。

